



対馬島の浅茅湾

令和5年8月29日

対馬やまねこ空港

福岡空港7時45分発のプロペラ機（DHC8-Q400）は機内で所持者不明のスマホが発見され、安全確認のために出発が遅れ、さらに空港混雑が重なり、対馬やまねこ空港に着いたのは定刻よりも45分遅れの9時であった。機内では最後部の窓側の座席が空いていたので、席を移る。進行方向左側に、玄海島、小呂島、壱岐島がよく見えた。また空港の近くでは浅茅湾^{あそう}の写真を撮ることができた。

対馬は平坦な広い土地がなく、したがって飛行場の適地はなかった。そこで浅茅湾に面する地峡部の山を削り、発生した土砂で窪地を埋め立てて造成、1975（昭和50）年に現空港が開港している。それまでは対馬島に渡る手段は船のみだった。現在は福岡空港から全日空が日に5便、長崎空港からオリエンタルエアブリッジが日に4便就航している。福岡からは30分、長崎からは35分を要する。

対馬島の海路の玄関口は南部の厳原港と北部の比田勝港である。博多港から九州郵船のジェットフォイルとフェリーがそれぞれ日に2便、厳原港との間を通う。また、JR九州高速船のジェットフォイルが1日2便、九州郵船のフェリーが1日1便、それぞれ比田勝港を結ぶ。さらに韓国の釜山からの高速船が比田勝港と厳原港の両港を結んでいる。

対馬島は北方領土を除くと、佐渡島、奄美大島に次いで大きな島である（橋でつながる淡路島を除く）。面積は695.7 km²、周囲は833.3 kmに及ぶ。福岡市から約138 kmの海上にあるが、韓国の釜山との間は約50 kmしか離れておらず、本土よりもはるかに近い。まさに国境の島なのである。

対馬島は南北に細長く、島の南側1/3ほどのところに西側から浅茅湾が湾入し、東側は細い地峡部でつながっている。浅茅湾は典型的なリアス式海岸で、多数の入江が複雑に入り組んでいる。

トヨタレンタカーの事務所でレンタカーを借り、9時20分に島の中心である厳原へ向かう。



浅茅湾につくられた対馬やまねこ空港（左上）（左）、空港ターミナル（右）

長崎県対馬振興局

対馬振興局は対馬藩の家老だった氏家家の屋敷跡にある。現在は国道382号になっている馬場筋と称する大通りは宗家の家臣の屋敷が並んでいた。長屋門と石垣が当時を忍ばせる。

振興局の総務課で管内図を入手する。以前振興局は「対馬百科」という小冊子を発行していた。この1冊で対馬の現状が理解できる便利なものであったが、5～6年前に発行をやめていた。

かつて「対馬百科」に掲載されていたデータの最新版を入手すべく、隣の建物にある原課を訪ねた。水産課ではデータを公表するには上司の判断が必要とのことだった。後日連絡するというので、携帯の電話番号を知らせた。続いて農業振興普及課で「対馬の農業」についてパワーポイントの資料を受け取り、説明を受ける。

対馬島は北部の^{かみあがた}上県郡上対馬町、上県町、峰町と南部の下県郡厳原町、美津島町、豊玉町の2郡6町に分かれていた。2004（平成16）年3月の広域合併によって対馬市が誕生し、1島1市になった。市役所は旧厳原町役場に置かれた。当初、旧町の役場は、対馬市役所の支所として行政サービスを旧町単位で行っていたが、2008（平成10）年に支所を地域活性化センターと改称し、さらに2014（平成16）年には5つの地域活性化センターを統合、豊玉を中対馬振興部、上対馬を上対馬振興部として、旧美津島、旧峰、旧上県にそれぞれ行政サービスセンターを置き、再編されている。

浅茅湾をはさんで北を上島、南を下島と呼び、南北の長さは約82kmに及ぶ。北の比田勝から南端の^{あそ}豆敷までは車で約3時間を要する。

対馬市の人口のピークは1960（昭和35）年の69,556人である。その後、一貫して減少し続け、対馬市が発足した当初の人口は約41,000人であった。しかしさらに減り続け、2020年の国勢調査時の人口は28,502人と、ピーク時の4割に減少している。世帯数は12,681戸である。地域別では、厳原町が10,349人と最も多く、これに美津島町の7,024人が続く。つまり浅茅湾南部の人口が圧倒的に多く、島全体の約6割を占めていることになる。高齢化率は38.6%であった。

対馬が文献に登場するのは、中国で3世紀に書かれた「魏志倭人伝」が最初であり、当時の対馬の様子が次のように記されている。

「始度一海千余里 至対馬国 其大官曰卑狗 副曰卑奴母離。所居絶島 方可四百余里。土地山険 多深林 道路如禽鹿径。有千余戸。無良田 食海物自活 乗船南北市糶。」

(はじめて一つ海を渡る。一千余里ある。対馬国に至る。そこの大官(長官)は卑狗(ひこ)といひ、副官は卑奴母離(ひなもり)という。住んでいるところは海に囲まれた島で、広さは四方四百余里ばかりである。その土地は山が険しく、深い森が多く、道路はけものや鹿の通り道のようなものである。また人家は千余戸がある。良い田がなく、海のを食べて自活し、船に乗り南や北に海を渡って穀物を買っている。)

この地理的な条件は基本的に今も変わらず、島の約9割が深い森におおわれ、海沿いの小さな湾に形成された小さな集落が圧倒的に多い。その数は200集落近くに及ぶ。こうした条件に島の産業も規定されてきた。

対馬の農業

上述したように対馬は山ばかりで農地はきわめて少ない。農地面積は788haで、島の面積に占める割合はわずか1.7%である。同じ長崎県内にある福江島や壱岐島などの比較的大きな離島と比べると、農地面積は圧倒的に少ない。比較的まとまった農地があるのは、佐須川、瀬川、洲藻川、三根川、仁田川、佐護川などの河川流域の河口部に限られている。

農家数は906戸(2020年農林業センサス)であったが、主業はわずか37戸で、準主業も44戸と少なく、自給レベルの農家が圧倒的に多い。

2021(令和3)年の農業産出額は5.8億円で、漁業生産を大きく下回る。また農業生産のピーク時と比べると1/3に落ち込んでいる。主な農作物は水稻、肉用牛、ソバ、アスパラガスである。米の島内自給率は50%ほどなので、島外から移入しなければならない。こうした事情は大昔から変わらず、対馬は朝鮮半島との貿易によって食料を確保してきた歴史を有する。このように農地が狭いにもかかわらず、過疎化と高齢化が一層激しくなっていることから、海岸部の小集落を中心に耕作放棄が目立っている。

畜産業の生産農家数は45戸である。令和3年4月時点の飼養頭数は342頭であった。対馬では珍しく赤牛を飼っており、全飼養頭数は192頭で、約半分を占める。赤牛の子牛は熊本県のセリに、黒牛は壱岐島のセリに出荷している。



佐須川流域の棚田(左)、島では珍しい赤牛(右)

河内酒造

県対馬振興局を後にして、金田城跡と城山に向かう。国道382号の鶏知(けいち)の交差点から県道24号に入り、少し走ったところに対馬で唯一の酒蔵・「河内酒造」があった。全国の離

島には焼酎のメーカーは多いが、日本酒の酒蔵があるのは、佐渡島（5社）、島前島（1社）、そして対馬の河内酒造に限られる。つまり日本酒をつくっている島は3島しかない。島は基本的に原料の米が採れない、あるいは貴重だから酒に仕向けるほどの余裕はなかった。したがって、佐渡島や島前島のように広い田んぼがあり、米が収穫できる島に限定されるわけだ。

ところが対馬の場合は上述したように田んぼは少なく、酒に回すほど米は穫れない。このため河内酒造の場合は、島内の米を使わず、島外から仕入れている。一方、深い山を背景として日本酒の醸造に欠かせない良質の水が確保できた。

河内酒造は1919（大正8）年創業の老舗である。同社のブランドは、対馬の名山・白嶽にちなんで「白嶽」という。日本酒の他に、米、麦、芋の各焼酎も生産している。同社は杜氏を雇わず、社長が杜氏を務めている。米の収穫が終わる秋口から仕込みにかかる。

ここで造られた日本酒は基本的に島内に流通しており、一部が福岡あたりにも流通しているようだ。島に滞在中はもっぱら対馬の地酒・「白嶽」を飲んだ。

土産に濁り酒を購入する。火入れがしてあるので、発酵は止まっているとのことだった。店には（特非）対馬次世代協議会が製造し、「コノソレ・キッチン」が販売者になっている商品が売られていたので、このうち対馬特産の椎茸の佃煮・一口椎茸を購入する。



対馬で唯一の酒蔵・河内酒造（左）、同社のブランド名となっている白嶽（右）

金田城跡

県道24号を箕形^{みかた}に向かう。道路脇に「城山入口」と書かれた道標が立っていた。ここから狭くカーブの多い山道を進む。左側は側溝、右側は崖できわめて慎重な運転を強いられた。対向車が来るとすれ違う場所は限られているから、対向車が来ないことを願う。1.8kmほどの道は幸い対向車がなく、登山口に着いた。

すでに車が3台停まっていた。残るスペースは車1台分しかない。切り返しをしながら駐車スペースに車を並べた。登山口には「続日本100名城」と書かれた幟が何本もはためていた。続日本100名城は財団法人日本城郭協会が2017（平成29）年に定めたものである。

登り口に粗末な杖が数本置かれていた。そのうちのまともな1本の杖を掴み、歩き始めると、上からガイドらしい女性が登山客4人とともに降りてきた。この女性が「地図を持っているか」と聞くので「ない」と答えると、傍に設置してあるポストのような容器から金田城跡の案内地図を取り出し、渡してくれた。

この地図に所要時間が書いてあった。登山口から山頂までは1時間と記されている。往

復2時間は覚悟しなければならないだろう。

倭国（大和朝廷）は663（白雉14）年、滅亡した百済を復興させるために、唐・新羅と戦い、白村江で戦い敗北する。翌年、唐・新羅の来襲に備え、辺境の地である対馬、壱岐、筑紫などに防人を配置、狼煙を設置して、連絡体制を整えた。そしてわが国最前線の対馬防衛のためにつくられたのがこの金田城であった。築城は白村江の戦いの4年後の667（白雉18）年とされている。浅茅湾南岸から北に突き出た城山に周囲約2.2kmにわたって石塁を築き、最も高い石垣の高さは6.7m、最も長く残っている石塁は最大49.3mである。そして国土防衛のために派遣された防人は東国から徴兵された。

11時19分に登山を開始する。日本軍は山頂に砲台を作るために幅2.5mほどの軍用道路を戦前につくっている。登山道はこの軍用道路なので比較的歩きやすい。杉林を抜け、7分ほど歩くと眼下に浅茅湾の枝湾である黒瀬湾を一望できるビューポイントに着いた。湾内には真珠、あるいはヒオウギガイと思われる養殖用の延縄施設が広がっていた。

少し進むと、三ノ城戸との分岐点に着いた。ここから金田城の城壁石垣が残存している東南角石塁を見ることができる。石垣の内側には掘立柱建物跡と書かれた遺跡があった。7世紀後半の遺構で、防人の詰め所や見張り場、あるいは近くにある南門守備の役割を担っていたと推定されている。

少し登ったところに南門の跡があった。さらに登ると東屋があった。すでに汗でTシャツはびしょりである。東屋で休憩をとることにした。この間、下山する3組の登山客とすれ違った。駐車していた車は3台だったので、この上には誰もいないだろう。

再び意を決して登り始める。「旧軍施設跡、ここより徒歩10分」と書かれた案内板が現れ、ヘアピンの道を折り返して登ると、その先に南西部石塁が現れた。これも金田城の石垣の一つである。さらに歩を進めようやく砲台跡にたどり着いた。12時29分だったから、ここまで1時間10分を要したことになる。



東南角石塁と掘立柱建物跡（左）、南西部石塁跡（右）

城山砲台跡

ロシア極東のウラジオストック（ロシア語で「東方を征服せよ」の意味）にある港は冬に凍結する。不凍港を求めて南下政策を進めるロシアは対馬中央の天然の良港である浅茅湾に目をつけていた。後述するように1861（文久元）年にはロシア軍艦・ポサドニック号が対馬の芋崎を半年間にわたって占拠する事件が発生する。結局、イギリス軍艦の圧力でロシア軍艦は撤退したが、自力で外国勢力に対抗できない幕府の無力を露呈した事件であった。

明治維新後、対馬近海の軍事的緊張が高まるなか、伊藤博文と山県有朋らは対馬を視察し、対馬は国防上最も重要な要衝として、1887（明治 20）年以降、東京湾の要塞化に続いて、対馬全体の要塞化が進められることになる。

この結果、対馬には日清戦争以前の第 1 期、日露戦争時に第 2 期、大東亜戦争時の第 3 期を合わせると合計 31 ヶ所に砲台がつくられた。そのうちのひとつが城山砲台で、1900（明治 33）年 4 月に着工し、翌年 11 月に竣工した。

山頂付近には 28 cm 榴弾砲 4 門が設置された。現在はその砲台跡と観測所や弾薬庫の跡、さらには兵舎棟跡や井戸などが残る。

山を削り、石垣を築き、石を道に敷き詰めて軍用道路を整備し、牛か馬を使って大砲や弾薬、資材、食料などを運び上げたのだろう。砲台整備まで 1 年半が掛かっているが、現在のように建設機材や輸送機材がない時代だから、大量の人員が現地から動員されたにちがいない。大変な作業だったと思われる。

砲台跡から城山の頂上までは険しい山道である。10 分ほど登ると山頂に出た。城山の標高は 276m だ。ここからは浅茅湾の湾口部を一望にできる。尾崎方面にマグロ養殖の生簀が並ぶ。眼下はほぼ垂直に切り立った断崖絶壁である。周囲に柵はないから、強い風が吹こうものなら、足元がグラついて転落しかねない。

山頂で一休みし、下山する。帰りに 6～7 人の団体客に会う。13 時 40 分に登山口に戻った。往復で 2 時間 20 分を要したことになる。

国道に戻り、道路脇の「レストラン・ライラック」で昼食にちゃんぽんを食べる。



28 cm榴弾砲の砲台跡（左）、城山の山頂（右）

地峡部の開削と架橋

対馬島の中央部は西側から浅茅湾が大きく湾入し、東部は地峡となっていることはすでに述べた。島の東西、つまり東側の東水道と西側の西水道（朝鮮海峡側）は島によって隔てられている。したがって反対側に行くには対馬の北端や南端を大きく迂回しなければならない。無動力船の時代であれば 4～5 日を要したであろう。そして危険も伴った。

小型船が交易の主体であった時代は、船を陸に揚げて運搬するか、荷だけを陸揚げして反対側の船に積み替えていた。この作業をする場所は移動距離が短く、かつ標高差が少ないところがいい。こうして選ばれた船越えの場所が、南部の大船越と北部の小船越であった。ちなみに遣唐使船は小船越の陸を引いて通ったといわれている。

しかし船が大きくなると陸越えは困難になる。そして主要な航路は島の北端を回り、東

海岸を南下する航路に変わる。浅茅湾から直接東海岸に抜けることができれば、航行時間は大幅に削減できる。当然の帰結として地峡部に運河を開削して船を通そうとの発想が生まれた。

最初に開削されたのが大船越である。1672（寛文 12）年に対馬藩第3代藩主義真によって約半年の歳月をかけてつくられた。延べ3万5千人の労働力が投入されたという。その後、運河の拡幅や浚渫が繰り返され、橋は木橋から鉄橋となり、現在に至る。

大船越橋の運河の脇に松村安五郎と吉野数之助の石碑が建つ。1861（文久元）年2月、ロシアの軍艦ボサドニック号が浅茅湾にやってきて半年間滞在、藩を挙げての大騒動となったことはすでに述べた。この年の4月12日に、ロシア兵がボートで大船渡瀬戸を強引に通過しようとしたため、安村安五郎がこれを阻止しようとしてロシア兵の発した銃弾に倒れた。一方、吉野数之助はロシア艇に捕らえられ、この屈辱に自害しようとしたが果たせず、釈放後も傷の手当てをせずに命を絶ったという趣旨のことが書かれていた。

一方、明治時代にはロシアの南下政策に対抗するため浅茅湾内の竹敷に海軍要港部が置かれた。しかし大船越瀬戸は水深が浅く大きな艦船を通すことができないため新たに久須保水道（万関瀬戸）を海軍が開削した。運河は幅22m、長さ300m、水深3mであり、ここに鉄橋（万関橋）を架けた。この鉄橋は対馬の下島と上島を結ぶ交通の要衝となり、またこの運河によって漁船、商船の運航の利便性は飛躍的に増した。万関橋は1956（昭和31）年にアーチ式の鉄橋に架け換えられていたが、老朽化したため1996（平成8）年に3代目の橋梁がつくられ現在に至る。なお、この運河は1974（昭和49）年に航路幅約40m、水深4.5mに拡幅されている。



大船越瀬戸と大船越橋（左）、久須保水道と万関橋（右）

万関橋の手前を緒方方面に抜け、そこから山の中に入ったところに姫神山砲台跡があり、対馬の砲台跡の中では最も保存状態が良いといわれているので、見に行った。ところが車がすれ違えないほどの狭い道で、ようやく対向車をかわし、広場で行き止まりになった。傍らの看板には砲台跡まで徒歩30分と書いてあった。金田城跡に登り、体力を消耗した後だったので、断念する。しかし30分というのは緒方の集落からの時間であることに後で気が付いた。たぶん5～6分歩けば登れたと思われるが、「後悔、先にたたず」になった。

上島東岸（豊玉町・峰町）

対馬では分水嶺が東に偏っていることから、東海岸は山からすぐに海になる。一方西海岸は河川が多く、河川沿いに狭いながらも沖積平野が形成され、田や畑が相対的に多い。

したがって東海岸の集落は農業への依存は少なくもっぱら漁業に依存していたと考えられる。そして東側はイカの漁場が形成されたことから、東海岸の各漁港にはイカ釣船が多いという特徴が見られる。

国道 382 号から県道 39 号に入り、東海岸を北上する。ここから豊玉町に入った。大漁湾々奥には九州電力の豊玉火力発電所が置かれている。長い栈橋が延び、燃料の重油を受け入れるバースとなっている。近くに旧塩浦小学校があったがすでに閉校になっていた。

鐘川（40 戸、79 人）の先を県道から離れて進んだ大漁湾の湾口の集落が**千尋藻**（102 戸、241 人）である。ここは旧豊玉町の役場が置かれていた仁位に次いで人口が多く、漁港内には豊玉町漁協の本所が置かれている。**曾**（72 戸、134 人）、**位ノ端**（61 戸、128 人）の集落を経て、峰町に入る。文中の括弧内の世帯数と人口は住民基本台帳上の令和 5 年 7 月末時点の数値である。

峰町の最初の集落が**櫛**（74 戸、186 人）で、櫛漁港（第 1 種）内にはイカ釣漁船が 10 数隻係留されていた。

続く集落が**佐賀**（264 戸、518 人）である。佐賀は宗家 7 代目の貞茂から 3 代、78 年間にわたり、島府が置かれていたところで、古来、対馬東海岸の中心地であった。集落の中心部にある円通寺には島主であった宗家のお墓がある。円通寺の前に「通信使李芸功績碑」が置かれていた。この李芸（1373～1445）という人物は対馬と朝鮮国との「通交貿易」に関する条約の締結に大きく貢献し、これにより倭寇の活動が静まったといわれている。佐賀漁港（第 2 種）にはたくさんのイカ釣船が係留されて、峯町東部漁協の本所が置かれている。

佐賀を過ぎると県道は山の中に入った。途中、訓練をしている陸上自衛隊の姿が見え、その近くの港には伐採された杉の木が積まれていた。海に出たところが**志多賀**（128 戸、209 人）の集落でイカ釣船 10 隻が係留され、こちらでもイカ釣が盛んなようだ。小さな川沿いに集落が形成され奥が深い。

つづく**志越**（26 戸、57 人）は小さな湾奥に形成された集落で、規模は小さい。



佐賀集落にある円通寺（左）、県道下の志越の集落（右）

上島東海岸（上対馬町）

2 つのトンネルを抜けた最初の集落が**小鹿**（84 人、176 人）である。ここから上対馬町に入った。小さな湾全体が小鹿漁港（第 1 種）で、集落は漁港を取り囲むように形成されている。

次が**一重**（60 戸、94 人）の集落であり、一重漁港（第 4 種）が整備されている。漁港に漁師がいたので話を聞くと、この地区はスルメイカ釣とアマダイ延縄の兼業が中心とのことだ。イカ釣は基本的に夜釣りで、「タンポ」と呼ばれる昼イカ釣りが一部で営まれているという。この集落は戦後まもなくサバ景気で賑わったことがある。沖合に漁場が形成され、島外のまき網漁船が集まり、その乗組員が大挙して上陸したので、飲食業と風呂屋、そして 17 軒の置屋が大繁盛したらしい。120 人の娼婦がおり、対馬一番の娼街になったという。しかし漁場が移動するとともに急速に衰退し、小さな漁村に戻った。

一重漁港の南側の入江に一重の集落、北側の入江に**芦見**（40 戸、63 人）の集落が形成されている。芦見川河口の船着場には吉福丸というまき網船団の船が係留されており、上対馬漁協芦見支所が置かれていた。芦見川の河口付近には小規模ながら農地がある。

芦見から山越えの道路を走り、城岳トンネルを越えた先が**琴**（104 戸、198 人）である。琴川河口の小さな入江に琴漁港（第 1 種）が整備されている。トローリングの竿を積んだ船が目立ち、イカ釣を兼ねているものも比較的多くみられる。漁港内には上対馬南漁協の本所が置かれている。集落は琴川の河口流域に形成され、上流部にはそれなりにまとまった農地がある。また集落内には「琴の大銀杏」と呼ばれる古木が立つ。樹齢 1,000 年を超えるらしい。

県道 39 号線を離れ、**茂木**（3 戸、3 人）の集落に行く。海水浴場が整備され、広い砂浜があった。この沖は日露戦争の日本海海戦（対馬沖海戦）の舞台となったところである。砂浜の先に「ロシア将兵上陸地」と書かれた石碑が建ち、その脇には戦後引き揚げられたロシア装甲船アドミナル・ナヒモフ号の砲身が置かれている。1905（明治 38）年、撃沈されたナヒモフ号からボート 3 隻で脱出したロシア兵はここに上陸、その後、琴の集落に移動し、地元の人々から食事や焼酎を与えられ保護されたという。



琴集落の大銀杏（左）、茂木浜のロシア将兵上陸地の石碑とナヒモフ号の砲身（右）

この先が**五根緒**（22 戸、35 人）の集落である。漁港背後の山際に集落が形成されている。漁港には磯船が 20 隻ほどと漁船が 10 隻弱置かれていた。五根緒は現在の場所から西北西に 2 km ほど離れた場所にあり、100 余戸の大きな集落だったらしい。漁業や製塩、交易で栄えたといわれている。しかし江戸時代に入ると密貿易が厳しく取り締まられ、農業への転換を迫られた。その結果、集落の規模は 20 戸ほどに縮小する。1879（明治 12）年から 3 年間かけて現在の場所に集落を集団移転し、その後は、漁業で生計を立てるようになった。

舟志湾奥の**舟志**（57 戸、98 人）、**大增**（37 戸、74 人）、**浜久須**（43 戸、70 人）の 3 つの集落を抜け、上対馬町の中心地・比田勝に向かう。舟志乃久頭神社はかつて亀の甲羅で

吉凶を占う亀卜所があったという。

比田勝

明治初期の比田勝は 40 戸の半農半漁の寒村であった。1907（明治 41）年に近代捕鯨の基地が置かれたことから急速に発展した。同年に島嶼町村制が実施されると豊崎村の役場も置かれることになる。戦前には下関と釜山を結ぶ連絡船の寄港地となり、南の巖原と並ぶ北の玄関口として地位を占めるようになる。

昭和 20 年代はサバの豊漁で比田勝港には多くのまき網漁船が入港し、サバ景気に沸いた。そして 1955（昭和 30）年 1 月に豊崎村と琴村が合併して上対馬町が誕生すると役場が置かれることになり、北対馬の行政、産業、交通、文化の中心地として発展することになった。また比田勝と下関間に航路が開設され、現在は上述したように韓国の釜山とジェット船が結び、北対馬の玄関となっている。港の近くには、船舶の国際線ターミナルと博多港を結ぶフェリーやジェットフォイルの国内線ターミナルが整備されている。

比田勝は過去に数回泊っているが、この地はもともと宿泊施設が少なく、港の前にある小さなホテル「つしまホテルプラザ」を 2 回ほど利用したことがあった。

近年、韓国人観光客がかなり増え、宿泊施設が不足していたからこれに目を付けたのが東横インチェーンである。比田勝の中心から 2 km ほど離れた海際に東横イン対馬比田勝が建つ。4 年前の 2019 年 9 月に開業している。8 階建てで、客室は全 243 室と対馬で最も大きなホテルだ。前回、2021 年に対馬に来た時にはこのホテルを利用しているので、今回は 2 度目ということになった。

比田勝を訪れるビジネス客はそれほど多くないので、ホテルの宿泊客の中心は狙い通り韓国人観光客である。ただ夏休みも終わりに近づき、しかも平日とあって客は少なく、ガラガラであった。この状態ではおそらく採算割れしていると思われる。

ホテルにはレストランはない。周辺には飲食店はもちろん店舗もない。したがって食事は比田勝の市街地まで行かなければならない。ホテルと比田勝の市街地は歩くと 30 分以上はかかるので、ホテルがバスを出してくれる。19 時のバスに乗り比田勝に向かう。韓国人の小太りの青年が一緒だった。前回利用したことのある「すし処・慎一」は定休日だった。隣の「島めし・北斗」は予約客で満席とのことで断られた。

しかたなく、商店街の飲食店を探すことになった。商店街は以前にも増して廃れた印象である。高齢化が進み、漁師も漁獲が減って元気がないのだろう。結局古くから比田勝で商売をしている「レストラン美松」に入る。2 代目のママさんは団塊の世代で、息子が現在店を仕切っているから 3 代目に入った。店の面積はかなり広く、人口が多く顧客で賑わった時代が想起される。1 組の家族連れの韓国人観光客がいたが、ママさんの話では韓国人観光客はあまり来ないという。韓国人にとってこの店は値段が高い印象を持たれているようで、結果的に地元の馴染み客に迷惑をかけずにすんでいると言っていた。

食事を終えて、港の前で送迎バスを待つ。暗闇のなか、岸壁付近では韓国人観光客が盛んに携帯電話で誰かと話している。帰りのバスは私 1 人であった。来るとき一緒だった韓国人は出発の時間までに来なかったからだ。運転手の話では、韓国人は平気で予約をキャンセルするそうで、定刻の 20 時にはホテルに向けて出発した。



比田勝港国際ターミナル（左）、市街地から離れたところにある東横イン対馬比田勝（右）

令和 5 年 8 月 30 日

殿崎

東横インは朝食が無料で提供される。見晴らしのいい最上階が朝食会場となっており、ここで簡単な朝食を済ませる。利用者は 7～8 人ほどとやはり閑散としており、ホテルの経営は厳しいに違いない。

ホテルを 7 時すぎに出発し、少し南に下って殿崎に行く。この沖が日露戦争を決定づけた日本海海戦の戦場だった。東郷平八郎率いる日本の連合艦隊は 1905（明治 38）年 5 月 27～28 日、この殿崎沖の日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を殲滅した。

殿崎周辺は現在、公園として整備されている。岬の先端には、海戦から 100 周年を記念してつくられた「日露平和友好の丘・殿崎」と書かれた石碑が置かれている。また地区住民によって 1911（明治 44）年に建立された「日本海々戦記念碑」や 100 年後の 2005 年にロシア政府によって建てられた「日露慰霊の碑」が並ぶ。この碑には日本海海戦で戦死したロシア兵の全氏名が刻まれていた。また碑の両サイドには日の丸とロシアの国旗がはためいている。

海戦で敗れたロシア兵のうちナヒモフ号の敗残兵は上述したように茂木浜に上陸、殿崎にはウラジミル・モノマフ号の水兵 143 名が 4 隻のボートに分乗して、この地に上陸した。戦況を見守る傍ら農作業をしていた農夫は、命かながら逃げ延びてきたこの水兵たちを水の湧き出す泉へ案内し、夜は西泊の民家へ分宿させるなど、手厚く持てなしたという。この島民の行為に感激した東郷平八郎は、記念碑の題字に「恩海義僑」と書いた。「戦争で死の海となった対馬の海が恩愛の海となった。対馬の人達の儀は、なんと気高いものだ」という意味のようだ。

一方、殿崎手前の道路脇に「対馬から世界を変えよう」と書かれた巨大なレリーフが置かれている。このレリーフにはバルチック艦隊司令長官ロジェット・ウェンスキー提督が対馬沖で重傷を負い、佐世保の海軍病院に入院中のところを、1905（明治 38）年 6 月に東郷平八郎が見舞った時の様子が描かれている。

海戦 100 周年を記念して、「対馬歴史顕彰事業推進委員会」が寄付を集めて建てたものだが、争いの後に上述した島民による敵兵に対する温かい対応と、将軍同士の友愛を称え、この日本人の心をもって世界を変えていこうという主旨と思われるが、碑文は一部よくわかりにくいところもあった。



ロシア政府が建立した日露慰霊の碑（左）、東郷平八郎が敵将軍を見舞うレリーフ（右）

鰐浦

続いて鰐浦に向かう。最初の集落が泉（123 戸、260 人）で、以前クエの調査で来たことがあった。泉漁港には上対馬漁協の泉支所が置かれている。漁協の荷捌場で1人の漁師が出荷の箱立作業をしていた。箱立していたのはマガキガイ（チャンバラガイ）とバテイラ（ギンタカ）の2種類である。海士漁で獲ってきた。チャンバラガイは大分県、ギンタカは広島県に出荷するとのことだった。泉の漁業は釣りと延縄が中心で、アマダイやカツオなどが多いという。

泉と豊の集落の間に大きな屋敷を構える対州窯があった。かつて細川元首相が陶芸を習いに来たとされる窯であるが、現在、人が住んでいる様子は見られない。

次の集落が豊（138 戸、264 人）である。集落は豊川沿いの山際に形成されていて、川の両側には農地が多い。この農地は江戸時代後期に進められた干拓によるものだという。河口部に豊漁港（第1種）が整備されており、イカ釣漁船やアナゴ筒の漁船の他に、磯船が目立つ。豊には海栗島うにじまの航空自衛隊に勤務する自衛官の官舎が3棟置かれている。

鰐浦に向かう途中、豊砲台跡の看板が出ていたので、見に行ったが、だんだん道が細くなり、トラブルが発生すると、海栗島行の船の乗れなくなる恐れがあるため、途中で引き返す。続いて海栗島や鰐浦の集落を一望できる韓国展望台に登ったが、あいにく展望台は工事中で立入りが禁止されていた。

鰐浦漁港（第1種）に行き、8時55分発の連絡船で海栗島に渡り、11時55分に鰐浦に戻った。

鰐浦は朝鮮半島に最も近いから、古くから朝鮮への玄関口であった。江戸時代には対馬藩の番所が設けられている。いわば国境に面する重要な集落であった。1672（寛文12）年に新たに佐須奈港が開かれると、1年を2期に分け、10～2月の冬季は鰐浦を利用し、3～9月は佐須奈に番所が移った。しかし、次第に佐須奈に中心が移っていったようである。

朝鮮通信使も釜山から鰐浦ないし佐須奈に最初に寄港した。その後、東海岸を南下し、巖原に入った。

鰐浦（120 戸、199 人）の集落は漁港背後の谷あいの土地に細い川を挟んで带状に形成されている。そして最も漁港に近い扇型の広場（ペーと呼ばれているようだ）には対馬で最大級の倉庫群が建つ。全体で100棟以上に及ぶだろう。この高床式の倉庫は対馬各地に見られるものだが、鰐浦が対馬の中で最も規模が大きい。倉庫の面積は3坪が最も多く、

「衣装倉」「俵物倉」「器もん倉」などと言われ、食料や生活用品などを保管していた。

鰐浦は農業が主で、肥料は海から採取した海藻類を利用した。また近くに農業の適地がなかったため、遠くの開墾した土地に船で通い、米を作った。したがって農業が中心であった時代は、肥料の海藻や漁具、農具もこの倉庫に保管されたのである。

このように母屋と倉庫を分離したのはには訳がある。鰐浦ではたびたび大火が発生しており、母屋と倉庫を分離することによって被害の拡大を防ぐ、リスク分散の狙いがあったのだろう。

倉庫群の前は駐車場になっている。駐車場は自衛官などに貸しているようだ。

江戸初期から中期（1670～1800年）にかけて、鰐浦は捕鯨の基地になったこともある。島外からやってきた鯨組によって事業は担われていた。よそからやってきた人が多く、現地でなくなった人の鯨墓が集落西側の林の中に残されている。

鰐浦の西方約2kmのところのところに鬼崎があり、この半島の付け根の入江周辺を矢櫃と呼んでおり、ここは中世のころ、外国人の専用港だったと、大江正康さんの「対馬・矢櫃（奇跡の港）に出てくる。

鰐浦漁港には、上対馬漁協の鰐浦支所が置かれている。ここには漁業・漁村の多面的機能の事例として密漁監視の取り組みを調査にきたことがある。当時は磯根資源が豊富で漁協がレーダーで韓国漁船の密漁監視にあたっていたのである。しかし近年は「磯焼け」が進み、アワビもウニも採れなくなり、韓国からの密漁漁船の来なくなっただけらしい。



鰐浦の集落（左）、高床式の倉庫群（右）

佐須奈

鰐浦から山の中の道路を進むと大浦湾に出た。湾内にはボンデンブイが浮かぶ延縄式の養殖施設が3ヶ所にあった。真珠養殖のようでもあるが、後述するように対馬島の真珠養殖の漁場は浅茅湾だけと聞いていたので、カキかヒオウギガイなどが養殖されているのかもしれない。

湾奥に大浦（99戸、171人）の集落ある。その集落前の海には漁船は少ない。正面の山の頂に海上自衛隊のレーダー基地が見えた。国境の島・対馬には陸海空の自衛隊が配備されている。

大浦湾の湾奥に架かる橋は「鯨橋」という。昔この場所に迷い込んだ鯨を捕ったという橋のいわれが立て看板に書いてあった。湾の反対側に河内（40戸、83人）の集落が形成されている。ここから国道382号に出る。

国道382号は北の玄関口の比田勝と南の玄関口である巖原を結んでいる。上島の国道は

島の中央部を通るが、その大部分は山中である。途中、上県町の佐須奈、峯町の三根、豊玉町の仁位などの旧町役場のあった市街地を結んでいる。

上県町に入った。最初の集落が**佐須奈**である。佐須奈は旧上対馬町役場があったところで、合併後、庁舎は上県行政サービスセンターになっている。庁舎の横には警察署が置かれているから、行政の中心地である。

佐須奈は上述したように鱈浦とともに朝鮮通信使の最初の寄港地で、大浦ないし佐須奈に入り、泉、西泊、鴨居瀬を経て、府中（現在の巖原）に向かった。旧役場前に掲げられていた佐須奈を紹介する案内板に、1764（明和元）年の朝鮮通信使はここでサツマイモを手に入れ、本国に持ち帰ったと記されていた。このサツマイモはその後、朝鮮半島全土に栽培が広がり、救荒作物として多くの人々の命を救った。サツマイモが南西諸島を經由して種子島に伝わったのは 1698（元禄 11）年のことなので、66 年後には朝鮮半島に渡ったことになる。

ソバは対馬島の特産品である。佐須奈の中心部に「そば道場・あがたの里」（旧役場の対面）があり、ここでは島内で栽培しているソバを原料とした蕎麦打ち体験ができ、蕎麦を食べることもできる。ちょうど昼食の時間になったので、天ざる蕎麦を食べた。10 割蕎麦で、すこし平たい太めの蕎麦であった。天ぷらも上手に揚がっていて、大満足。



上県町の旧庁舎（左）、そば道場・あがたの里（右）

佐護川の集落

佐須奈から山中を通り、トンネルを 3 つ抜け、坂を下った先が佐護である。途中に杉の植林地、林地内で椎茸栽培をしている場所があった。国道を離れ、恵古の集落から佐護川沿いを湊まで下り、さらに対馬野生生物センターに向かうことにした。

恵古（53 戸、85 人）、**佐護**（仁田ノ内 57 戸、101 人、中山 6 戸、13 人）の集落を通る。これらの集落は農村集落で、佐護川沿いに水田が開けている。

道路の途中に佐護小学校の跡地があった。校門の前で女性が掃除をしていた。校舎跡は 2013（平成 25）年 3 月から宿泊施設と食堂として活用されている。大きな体育館があったが、こちらは使われていない。宿泊施設は「さごんヴィレッジ」と称し、個室 1 室と男女のドミトリーが 2 部屋（各部屋定員 8 名）ある。ドミトリーの宿泊料金は 1 泊 4,400 円を少々高めである。また食堂は「さごんキッチン」と称し、営業は金・土・日の週 3 日間だけで、しかもランチのみだ。

続く集落が**井口**（27 戸、49 人）である。集落の中心部に交番があり、その前の対馬名

物の「かすまき」をつくっている海老名名月堂でこれを購入した。かすまきとはカステラ地に餡子を巻いた和洋折衷のお菓子である。「どら焼き」を丸めたものと思えばいい。

井口の集落に続いて、佐護川の川向に友谷（39 戸、77 人）の集落が見えた。ここから河口にかけては土地改良によって整備された水田が広がっている。おそらく対馬で最も規模の大きな水田であろう。

河口部には湊（72 戸、137 人）の集落が形成されている。佐護湊漁港（第1種）が整備され、多くの漁船が係留されていた。したがって湊は漁業が中心と思われる。

つまり、この佐護川の流域の集落は河口域の湊を除いて農業を中心の集落である。そして対馬を代表する田園地帯といえるかもしれない。宮本常一の「対馬漁業史」の中に佐護川流域のイカダ船の話が出てくる。彼が調査した戦後まもない時期には、深山 20 隻、恵古 30 隻、仁田 20 隻、井口 15 隻、その他友谷、湊などに若干あり、だいたい 100 隻あったと報告している。このイカダ船は川で使用するのではなく、主として海での海藻の採取に用いていた。もちろんこの海藻は農業用の肥料として採取していたのである。このイカダ船は海で使用した後、用事がなくなるとばらばらにして藻小屋の中か、その外に積み重ねておき、また藻を採るところになると組み立てて用いたそうだ。

漁港の近くに天神あめのかみたくすいだま多久頭魂神社が置かれている。この神社の御神体は背後の天道山である。普通の神社と異なるのは社殿がなく、石積みの塔で結界（仏語で、区域を制限すること）する古い信仰形態を残している点に特徴がある。この石塔は四角錐形に石を 2.5mほど積み上げたもので、境内に 2 基置かれていた。こうした形式の神社を見るのは初めてであった。

漁港には「新羅国使毛麻利叱智朴堤上公殉国之碑」と書かれた石碑が建っていた。碑文によると、五世紀初頭、倭国と新羅国は通交関係にあり、新羅は親善のため奈勿王の子・末斯欣を倭国に送ったが、その後、この王子の帰還を要請して、王使利叱（朴堤上）を倭国に派遣した。末斯欣と新羅国使一行が帰国の途上、対馬の鉏海水門においてトラブルが起こり、智謀と勇気を兼ね備えた毛麻は王子を無事帰国させたが自身は捕らえられ使命に殉じて果てたという。この碑は対馬と韓国の両方で委員会を構成し、建立されたものである。こうした韓国と共同の石碑は対馬島内で結構見かけることになる。

湊漁港は3区に分かれ、防風対策のネットが張られている。トローリングの船が多い。



佐護川流域の田園地帯（左）、佐護川河口の湊の集落（右）

対馬野生生物保護センター

湊漁港から背後の山に入り、棹崎公園の中にある対馬野生生物保護センターに向かう。

対馬に生息する希少な野生生物の保護にあたる拠点施設で、環境省、長崎県、対馬市が共同で運営している。

この施設は主にツシマヤマネコの生態や現状を解説し、野生生物保護への理解を深める普及啓発を図ることにより、希少野生生物の保護を目的にしている。

入館料は無料で、毎週月曜日を除く毎日、10時から16時30分まで開館している。2年前に訪れた時はちょうど新型コロナが流行している時期で非公開だったので、今回初めて訪れることになったものだ。

ツシマヤマネコは日本では対馬島だけに生息する野生の猫で、陸続きだった10万年前に大陸から渡ってきたと考えられており、ベンガルネコの亜種とされる。ツシマヤマネコがイエネコと異なる特徴は、①耳の先が丸く、後ろに白い斑点、②胴長短足、③額に縦縞、④尾が太くて長い、という点である。

1971（昭和46）年に国の天然記念物に指定された。1970年代は対馬全島に300頭ほど生息していたと推定されていたが、その後、生息環境の悪化や交通事故などで生息数が減少。このため1994（平成6）年に「種の保存法」（絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律）に基づき、国内希少野生動植物に指定された。ツシマヤマネコの分布は対馬の上島だけに限定された時期もあったが、最近では下島でも生息が確認されており、現在の生息数は90～100頭と推定されている。

館内は、生物多様性についての解説、ツシマヤマネコの特徴、対馬の自然とくらしの関わり、保護・増殖活動の取り組みなどがパネル展示されていた。また実物のツシマヤマネコが飼われており、直接見ることができた。

飼育室には1頭のツシマヤマネコが寝ていた。顔を見たいので、口笛を吹くと反応して顔を上げた。確かに顔の正面に縦縞がある。日本の野生猫はツシマヤマネコの他にイリオモテヤマネコが知られているが、イリオモテヤマネコの場合は生きたエサでないと食べないため飼育が難しいと聞いていた。事実、西表島の野生生物保護センターでは飼育しておらず、剥製しか展示されていない。この点を窓口の人に聞くと、ここで飼育しているツシマヤマネコは動物園で飼育されていたもので、飼育歴は8年に及ぶそうだ。餌は死んだものを与えているといい、すでに野生は失われている。ちなみにツシマヤマネコは全国の10ヶ所ほどの動物園に飼育されているようだ。



対馬野生生物保護センターの建物（左）、飼育されているツシマヤマネコ（右）

なおイリオモテヤマネコと同様、生存を脅かす最大の要因が交通事故なので、道路上には注意を喚起する看板が貼られており、「エコドライバーズマニュアル」なるパンフレッ

トが作成され、配布されている。

上県町南部集落

再び国道に戻り、山中に入る。「御嶽やまねこトンネル」を通り、もう一つのトンネルを抜けると、目保呂ダムからの県道 180 号と合流し、瀬田（1 区：56 戸、119 人、2 区：59 戸、113 人）の集落に入る。道路脇に国本神社があり、トイレがあったので用を足す。ここを過ぎると檜滝（116 戸、228 人）の集落である。瀬田、檜滝とも内陸部にあり、農村集落になる。国道を右折して県道 56 号に入り、ここから海岸沿いを行き止まりの田ノ浜まで行く。

仁田湾に面した最初の集落が犬ヶ浦（50 戸、111 人）である。漁船が 20 隻ほど係留され、漁港内では魚礁の組み立てが行われていた。

山越えをした先が御園（47 戸、90 人）の集落で、こちらは純漁村である。谷あいには家が並び、越高漁港（御園地区、第 1 種）が整備されている。イカ釣漁船が 10 隻ほど、磯船 20 隻ほど係留されていた。漁協には漁師が 4～5 人集まって話し込んでいた。

トンネルを抜けた先が腰越（25 戸、46 人）の集落で、小さな川の谷あい形成されており、漁港は離れたところにある。越高漁港（第 1 種）では小型定置網があり、漁師の奥さんが網の手入れをしていた。夫婦と親子で定置網を営んでいるという。最近是不漁が続いており、カンパチの幼魚が少し入る程度で、潮が速くてだめだと嘆いていた。

続く集落が伊奈（51 戸、84 人）であり、伊奈漁港（第 4 種）に伊奈漁協と書かれた建物があった。ただし今年 4 月に上県町漁協と合併しており、上県地区の漁協は一本化されている。伊奈にも定置網漁業が営まれているようで、定置の船や網が置かれていた。

伊奈には、江戸時代、捕鯨の基地が置かれていた。鯨納屋は集落から離れた場所にあったから、地元の人と捕鯨に携わる人との交流は少なかったとされる。ただ鯨が獲れた時は人手がいるから村人全員が手伝ったようだ。主として捕鯨で働いたのは他国の者か、後述する曲集落の者で、特に羽差（網で囲った鯨に銚を打ち、弱った鯨に飛び乗って鯨の潮吹鼻にロープを通す役割を担った人）は壱岐と曲の者が担った。伊奈の捕鯨は 1791（寛政 3）年に対馬藩が曲海士を使って始められ、その後、1832（天保 3）年には亀谷卯右衛門が鯨組を組織し春納屋（子を産むために北洋から暖かい海に回遊してくる鯨を漁獲対象とする春季操業の小屋）を経営した。そして伊奈における捕鯨業は明治 10 年代に終焉している。

網漁業も捕鯨と同様、大敷網が島外のものによって営まれていたが、明治時代になって地元の人が営むようになる。地元民による漁業の中心は採貝藻と一本釣、延縄であった。明治以降はイルカが盛んに捕られた。イルカは南方から上ってくることが多く、その群れを見つけるのは仁田湾口の南岸、外浦に面した女連のものだったからイルカ漁は女連、伊奈の両村と隣の志多留の 3 集落が共同で営んだ。

なお、伊奈には 1813（文化 10）年に伊能忠敬の測量隊が滞在している。

伊奈の隣が志多留（36 戸、51 人）の集落である。集落の前には広い砂浜が広がる。集落の背後に田があった。ここで道を間違え、引き返す。集落背後の小河川の上流に農地、小屋群ある。小屋群は鰐浦のものに比べると規模はるかに小さい。なおこの集落では縄文後期から弥生中期にかけての貝塚が見つかっている。

続いて田ノ浜に向かう。田ノ浜（11 戸、20 人）の集落で道は行き止まりになった。過疎化が進んでいて、人家は少なく、だれも見かけない。人家の塀は立派な石垣で囲まれて

いる。そのうちの1軒に、「フラットアワー」という合同会社の看板が掲げられていた。何をする会社かわからない。

田ノ浜は寛永年間に肥前田代（現在の鳥栖市）から藩命によって移住してきた一族が新田を開いたのが始まりとされている。このため、背後に広い田が広がっている。しかし大部分が耕作放棄地だった。田の畔板を撤去する作業をしている人に話を聞いた。

現在、田ノ浜の集落で耕作をしているのはこの人を含めて3人だけになってしまった。この人はかつて4～5町歩ほどを耕作していたが、現在は2反3畝に縮小しているという。昔は100戸ほどが耕作していたそうだ。そして、ここの田は伊奈、志多留の人たちが所有するものもあった。

田ノ野漁港（第1種）には漁船が1隻しかなかったので、漁業はほとんど行われていないのだろう。田ノ浜から来た道を引き返し、国道に向かった。



御園の集落（左）、田ノ浜の田んぼと耕作放棄地（右）

峰町西岸

再び国道に戻り、山中を進む。山田山トンネルを抜けると峰町になる。

峰町の中心部に向かう途中は山と田園地帯が続き、やがて三根の集落に入った。三根は旧峰町の役場が置かれていたところで、行政の中心である。旧役場の建物の一角は峰町歴史民俗資料館になっている。町内の遺跡から出土した黒曜石の矢じりなどの考古学的資料や山仕事や漁業関係の資料が展示されていた。

中心部から国道を離れ、三根湾沿いを木坂に向かう。途中、杉の大きな伐採地があった。その先が**狩尾**（33戸、75人）の集落である。山肌に沿うように家が並ぶ。湾全体が三根漁港（第1種）になっていて、漁港には豊玉漁協峰西支所が置かれていた。港内にはイカ釣漁船数隻の他に小型定置網とおぼしき漁船や網が置かれていた。

三根湾を離れてひと山こえた先が**木坂**（23戸、43人）の集落である。小さな川沿いの谷戸地に家が並び、やがて海に出た。海の近くの家は強い北西風に曝されるので、頑丈な石垣で囲まれている。海側には木坂漁港（第1種）が整備されているが、3基の簡易的なポンツーンがあるだけで、磯船が2隻係留されているだけだった。木坂は農業が中心のようだ。この集落は**国幣中社**（神社の等級で、官幣に次ぐ序列）の社格を有する**海神神社**の神領であり、**社家の村**であった。

集落のはずれに木坂御前浜園地があり、ここに石造りの藻小屋が2棟並んでいた。もちろん現在は使われていないが、貴重な民俗的資料であることから、保存のための工事が行

われていた。木坂は磯根漁業を中心とする半農半漁で暮らしを立ててきた。農業用の肥料は専ら海から採取した海藻であった。採取した海藻類は干して、この藻小屋に収容していた。各家が干した海藻を保存する倉庫を持っていたのである。最初はワカメ、次いで肥料藻のドロモ、アワガラ、ホシカリノス、カナモ、ホンダワラ、カジメなどを歩いて採った。さらにフノリ、アオサの口開けがあり、5月中頃にテングサの口開けとなった。また、この間にイワノリも採った。貝類はアワビ、トコブシ、サザエ、ウニ、ナマコを自由に採ることができた。ただ、釣り漁はほとんどなく、網漁と採貝藻が中心であった。

木坂から少し離れた次の集落が青海^{あうみ} (21 戸、36 人) である。こちらも木坂と同様、小さな川の谷戸地に家が並び、川の両側と北側の丘陵地帯に段々畑の農地が広がる。各家の周囲を石垣で囲むスタイルはやはり木坂と共通する。青海はかつて両墓制だったらしい。海岸の砂浜に土葬し（埋め墓）、慈眼寺に拝み墓を置いた。しかし海岸脇に新しく区画された墓が 20 基ほど整備されているところをみると、すでに埋め墓が拝み墓になって一本化されているようだ。この集落には漁港がなく、砂浜が続く。この砂浜では「青海のヤクマ」(海岸の石を円すい状に積み上げて、男児の健やかな成長や五穀豊穡を願う伝統行事)が行われていると集落入口の案内板に書かれていたが、その記述は平成 2 年 2 月のものであることから、すでに 30 年以上を経過しており、少子高齢化が進んだ今日、今でも残っているかは疑わしい。

津柳に向かう途中で、4～5頭の鹿に遭遇した。何れも小鹿だった。断崖絶壁の下に津柳 (18 戸、36 人) の集落があった。人家は 10 数軒確認されたが、空き家も 2～3 軒みられる。津柳漁港 (第 1 種) には磯船が 4 隻係留されているだけだった。港の隅に小型定置網に使用される漁船が係留されていた。近くにいた人に聞くと、津柳の集落の人の船ではなく、別の地区 (ヒサノウラと言っていた) の滝本さんがやっているとのことだった。

17 時 39 分に津柳を出発し、田志川の集落を抜け、国道に出た。田志川の両側には田やソバ畑が多く見られた。吉田の集落を過ぎて、豊玉町に至る。しばらく山中の道が続く、「波自染女の碑」^{はじのうねめ}を見て、田の集落を通り、18 時 50 分ごろに巖原のホテルに着いた。



木坂の藻小屋 (左)、津柳の集落 (右)

令和 5 年 8 月 31 日

巖原

7 時 50 分に東横イン対馬巖原店を出る。ホテルの前にある「対馬市交流センター」の地下駐車場からレンタカーを出す。この日の午前中は対馬南部を回ることにした。

対馬の山はそれほど高くないが、山の傾斜が急で、村々の立地するところの多くは入江の奥の平地であり、三方を山で囲まれている。広い平地がないから、村のほとんどが小さな集落である。

比較的大きな集落は城下町であった巖原と豆酏、比田勝などに限られる。

巖原は古くは国府の所在地であったが、島主となった宗貞国が 1468（応仁 2）年に峰町の佐賀から居を国府に移してから対馬の城下町として発展した。当時は府中ないしは府内と称されたが、1869（明治 2）年に巖原と改名している。

巖原には、対馬市役所、長崎県の対馬振興局、保健所、消防本部、税務署、長崎地裁巖原支部、長崎地検巖原支部、警察署などが置かれ、対馬島の行政の中心地である。また金石城跡、万松院、武家屋敷通り、八幡神社などの多数の寺社仏閣、などの歴史を伝える施設も多い。島の中心なので宿泊施設と飲食店が集中し、対馬博物館や「ふれあい処つしま」などの観光施設も集積している。これらは国道 382 号線の両側に並んでいる。

飲み屋を含む飲食街は国道を一本隔てた川沿いにまとまっている。ただし飲み屋は以前ほど多くない。滞在中は「和らく」と「千両」という店で夕食を食べた。

巖原の市街地の中央を流れる川の下流は巖原港であり、釜山航路の巖原港国際ターミナルと博多・壱岐を結ぶ国内ターミナルが整備されている。国道 382 号はこの港で終点になり、県道 24 号に変わる。

県道を南下すると、久田漁港になる。埋立造成された土地に巖原漁協の荷捌所と水産物の直売所「対馬海流」があった。直売所のオープンは 10 時からなので、販売品は確認できなかった。道路を挟んだ斜め反対側に巖原漁協の本所がある。3 階建ての立派な建物だ。同漁協は対馬南部の阿須湾を除く各漁業地区の漁業者をカバーしている。

巖原の市街地は周囲を取り囲む山際へと延びて拡大し続けているようだが、少し走ると人家は全くなり、深い山へと変わった。



巖原の市街地（左）、対馬市役所の建物（右）

対馬南部・東海岸の集落（巖原～豆酏）

対馬南部の海岸線は険しい地形のため道路をつくることができなかったようで、県道 24 号は山の中腹を走る。このため、各集落に行くには、県道から長く細く曲がりくねった坂を下る必要があるのだ。

尾浦（22 戸、46 人）の集落は県道から坂を下った先にある。東南に開いた浅い湾に尾浦漁港（第 1 種）が整備されている。漁港の背後にわずかばかりの農地があり、集落は漁港を挟んで二手に分かれている。漁船は磯船（船外機）と小型のイカ釣兼曳釣の漁船を中

心に 20 隻弱係留されていた。漁港背後の崖下には恵比寿神社、^{ひしずめ}火鎮神社、木根神社という 3 つの小さな社が置かれ、その前に細い木製の鳥居が立っていた。

県道 24 号に戻り、再び途中から長い坂を下った先が^{あがみ}安神 (57 戸 67 人) の集落である。集落の上段に最近、対馬市のゴミ焼却場が整備されたようで、道路のいたるところに「対向車注意」の幟がたっていた。ゴミを搬入する車両が多く通過するようになったためだろう。長い坂を下った先が安神である。ここも尾浦と同様、東南に開いた浅く狭い湾があり、尾浦漁港 (第 1 種) が整備されている。この背後に集落が形成されているが各家は木々に埋もれている。集落の周囲には狭いながらも農地があるが、耕作放棄が目立った。小さな川を挟んだ南側は玉石の海浜が続き、海水浴場となっている。このため海岸にはトイレとシャワー室が整備されていた。漁港には漁船が 4 隻、船外機が 1 隻おかれているだけで、漁業はあまり行われていないようだ。海岸のはずれに真新しい神社が鎮座する。

それにしても対馬市は全く人目につかない谷あいにはクリーンセンターをつくったものだ。安神から戻るころにはゴミの収集車や個人で持ち込む軽トラとすれ違うようになった。とたんに車の通行量が増え、集落の住民は面食らっているに違いない。

次の集落が^{くわ}久和 (50 戸 87 人) である。集落内に自販機が置かれていたのでお茶を購入する。この集落は久和川沿いの谷戸地に形成されている。比較的広い平地があり田も多いが、集落から離れた奥まったところの耕地は荒廃していた。久和漁港は河口部に建設されており、旧漁港に加えてその外側に新たに拡張工事が進められている。未だ工事中的のようで、漁港用地には製作されたたくさんの消波ブロックが並んでいた。河口の西側は砂利浜になっている。漁港には漁船 7 隻と船外機 1 隻が係留されていた。このほかに陸上にも多数の船外機が陸揚げされている。この集落にも神社があり、どういうわけか「東宮殿下渡欧記念」(大正 10 年 3 月 3 日) と書かれた石碑が置かれていた。

県道にトンネルがいくつかあったが、何れもすれちがうことが困難なほど狭い。したがって対向車が来た場合はトンネルの手前で待機する必要がある。幸い対向車に遭遇することはなかった。



三方を山に囲まれた久和の集落 (右)、与良内院の集落 (左)

次の集落が内院である。内院は川を挟んで、東側の与良内院 (42 戸、80 人) と豆靨内院 (16 戸、27 人) に分かれる。両集落の中間点ともいえる橋の上でお会いした地元の人によると、昔から両集落は仲が悪かったそうだ。このため寺は別々で、与良内院は地元の曹洞宗甘露寺だが、豆靨内院の寺は豆靨にあるという。ただ最近は少し変わってきて、以前であれば区長も別々に立てていたが、今は一本化されているらしい。恐らく過疎と高齢化が進んだ影響なのだろう。

内院は突棒漁業の基地として盛んな時期もあったが、現在は漁業者の高齢化で、漁船数は盛期の 1/3 ほどに減っているという。2つの集落を挟む川沿いには比較的広い農地があるが、大部分は耕作が放棄され、現在、米を栽培しているのは3戸だけだという。河口に西側、つまり豆靱内院側に内院漁港（第1種）が整備されており、漁船 10 隻と船外機 10 数隻が係留されていた。これまで通過してきた集落の中では漁船数は最も多い。

豆靱湾

対馬の最南端の神崎と西南端の豆靱崎を結んだ広い湾が豆靱湾である。湾は南に開けており、東、西、北からの風波はよく避けることができる。そこで北西風や北東風が荒れる時は避難港として機能した。このため、豆靱漁港は第4種に位置付けられている。

この湾内には浅藻と豆靱の2つの集落がある。

山の中腹を走る県道からは浅藻の集落が一望できる。急坂を下った先が浅藻地区の漁港（豆靱漁港の一部）で、広い埋立地が造成されている。ただし建物は何もない。漁港には漁船 13 隻が並んで係留されていたが、磯船は見かけなかった。浅藻（66 戸、97 人）は湾奥の開墾地を中心に発達した奥浅藻と海岸に発達した中浅藻と小浅藻に分けられる。奥浅藻はかつて薪炭材を運ぶ人々と炭焼きたちが住んだところだ。

中浅藻と小浅藻の集落は小さな湾の西側斜面に形成されている。理由は定かではないが、この地は藩政時代に人が絶え、無人の浦となっていた。明治後半から急激に発展、竜良山の伐採解禁による林業関係者の居住に続き、漁業者と商業者が移住してきた。そしてたちまち大きな集落を成した珍しい浦と言われている。小浅藻は山口県周防大島の久賀の人によって、中浅藻は同じく沖家室おきかむろの人を中心に開けた。

宮本常一の調査によると、明治末までの転籍者の出身地は山口県久賀町 25 名、山口県の久賀村以外 3 名、広島県 1 名、福岡県 7 名、佐賀県 3 名、長崎県 4 名、和歌山県 1 名という内訳であった。

かつてこの地で強大な勢力を築いたのが市丸馬太郎である。福岡県の糸島の出身であった。貧農の生まれで、無一文で対馬に渡り、神崎灯台の水くみとして働き、金を貯めてそれを元手に官林の払い下げを受け、炭を焼いて、本土に運搬する商売を始める。その後、鮮魚の運搬船を経営するようになり、1921（大正 10）年には運搬船の機械化を進め、生魚問屋として生魚運搬業を兼ねる。最も多い時は 13 艘の動力運搬船を持ち、問屋経営では島内随一といわれるに至ったといわれている。漁港脇にレンガ造りの古い倉庫が残されていた。地元の人によると、この建物は「イチマルさんが使っていた倉庫」だという。

ブリが減り、タイの漁場が朝鮮に移り、ハイオ（カジキ）が減り始めると、浅藻の集落はにわかには衰退し始め、寒村に戻った。

浅藻から豆靱に抜ける道路は片側一車線となり、良い道になった。豆靱（346 戸、595 人、上町、中町、浜町の合計）は神田川河口の沖積平野に形成された集落で、集落背後に比較的広い農地を抱える。厳原町の中では、厳原に次いで人口が多く、対馬南部の代表的な集落である。

漁港には二重三重に防波堤が整備され、対馬屈指の避難港である。港内には 20 隻以上の漁船が係留され、陸上にも多数の船外機が置かれていた。漁港の一角に「豆靱崎定置網組合」の事務所が置かれている。かつて大洋漁業（マルハ）が営んでいた大型定置網を引き継いだものらしい。

市街地の中心部に対馬市役所豆酏出張所と豆酏住民センターと書かれた3階建ての建物があった。その先に国の重要文化財に指定されている主藤家住宅がある。19世紀中ごろに建てられたと推定される対馬の代表的農家の住宅らしい。ただ現在も人が住んでいるようで、内部の見学はできなかった。



浅藻漁港に残る廻船問屋市丸のレンガ造りの旧倉庫（左）、豆酏住民センターの建物（右）

対馬南部・西海岸の集落（豆酏瀬～小茂田）

豆酏から坂道を登り、峠を越えて下った先に瀬川が流れている。この川の両側に豆酏瀬（23戸 52人）と佐須浦（28戸 62人）の集落が形成されている。川の両側に農地が広がり、米が作られていた。左岸の河口には瀬漁港（第1種）が整備されており、10隻ほどの漁船が係留されている。両集落は半農半漁を生業としていたのだろう。

次の集落が久根浜（45戸 90人）である。集落は河口部に固まっており、特に右岸に家が多い。河口部には久根浜漁港（第1種）が整備されている。漁港内には漁船5～6隻、細長いポンツーンには磯船14～15隻が係留されている。おそらく磯根漁業を中心とする小規模な漁業を営んでいると推定される。集落背後の久根川沿いには両岸にかなり広い農地が広がり、上流部の久根田舎（45戸、90人）の集落へと続いている。そして農地では一面にわたって米が作られていた。久根浜は磯根漁業を中心とする半農半漁、久根田舎は農業を中心として生計を営んでいた。もともと両集落は、古くは久根村を構成していた。久根の古名は大調^{おおつき}といい、今では閉鎖されている地元の小学校も大調小学校といった。この土地はかつて良質の銀を産出し調貢したことから大きな調の里という意味だったという。

久根田舎から県道は山中を通り、海に出た先が上槻^{こうつき}（29戸 51人）である。集落は河口にへばりつくように形成されている。川の前面には小さな島があったが、この島との間を埋めて泊地を造成したのが上槻漁港（第1種）である。ただ港内には船外機が6隻係留されているだけで、上槻の漁業はきわだって低調と思われる。集落背後の河口部は農地が確保され、米が作られていた。

上槻の集落から山中に入る。県道24号を椎根川沿いに下るとやがて椎根（58戸、112人）の集落が現れた。この集落には高床式の石屋根の倉^{ぐら}群が残っている。鰯浦でも述べたように対馬では備蓄してある食料や家財を、火災や強風等の自然災害から守るために母屋とは別に倉を建てた。この倉の屋根が平板状の石で葺かれている。石屋根は対馬の特徴的な建物で、今も残るのがこの椎根集落なのである。

対馬の石屋根は約300年前から始まったとされている。対馬市教育委員会の調査では1978年から2006年までの22年間に182棟の石屋根の倉が消失したと報告されており、対

馬では全国的に見ても稀な石屋根がかなり広範囲に分布していたことを物語る。小林ら（2017）は 2016 年に対馬全島の石屋根の倉を調査し、全部で 43 棟が現存しているとした。巖原町内が最も多く、町内では久保田舎とこの椎根に多いことを確認している。

この石板の産地は島山島と豆敷である。石屋根の倉を有する集落は島の東側の川沿いに多いことから、米などの穀物が穫れ、しかも石の運搬に便利な川沿いに多いとのことだ。



河口域につくられた瀬漁港（左）、椎根集落の石屋根の倉（右）

銀山と矢立山古墳群

椎根川を下ると海に出た。

地方港湾の小茂田港から島を横断して巖原に向かう。佐須川沿いの道路は県道 44 号になり、佐須街道とも呼ばれる。佐須川の流域は対馬では比較的広い沖積平野になっていて、田が広がる。川上に登るにしたがって棚田にかわっていった。この一帯は対馬では数少ない田園風景を形成している。

県道脇に「銀山」という直売店兼食堂があったので、ここで手づくりのパンを購入し、車の中で食べる。この直売所の名称は、この付近の檜根に日本最古の銀山があったことにちなんでつけられたようだ。

「日本書紀」には 674（天武 2）年に対馬で産出した銀が朝廷に献上されたと記されているという。銀の精錬は、①銀をいったん鉛に溶け込ませて抽出する灰吹法と、②水銀に溶かすアマルガム法、に大別されるが、対馬で行われていたのが、前者の灰吹法である。この灰吹法は島根県の石見銀山や佐渡金銀山でも採用されている。そしてこの技術は朝鮮半島から日本にもたらされたものであり、半島に一番近い対馬が最初の受け入れ地だった可能性が高いといえる。

13 世紀以降、対馬の銀山はいったん記録から姿を消すが、江戸時代になると対馬藩により銀山経営が復活する。しかし資源量が少なかったとみえ、幕末には再び衰退に向かった。

この店の先に矢立山古墳群が発見されている。佐須川の右岸・標高 45m ほどの丘陵地に立地する。1948（昭和 23）年の東亜考古学会による学術調査で 2 基の古墳が発見され、さらに 2000（平成 12）年から始まった巖原町と福岡大学による調査で、3 号墳が発見されている。この古墳群は国の史跡に指定されている。

1 号墳は東西 5.2m、南北 4.5m、高さ 2.4m の墳丘に貼り石をほどこした 3 段築成の方墳である。埋葬施設は長さ 4.8m の横穴式石室で、室内からは金銅装大刀、木棺に使用された鉄釘、須恵器片などが出土している。2 号墳は東西 8.8m、南北 10.5m、高さは 2.5m を超える墳丘に貼り石をもつ 3 段築成の長方形墳で、T 字形を呈する横穴式石室が特徴

的である。出土遺物は金銅装大刀、銅椀、須恵器の長頸壺などであった。3号墳は積み石塚で、段築は確認されていない。埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、鉄刀、鉄鏃、土器類などが出土している。この古墳群は7世紀前半から終末にかけて築造、新たに発見された3号墳は1・2号墳よりも後の築造で、規模や構造などにおいて様相を異にしている。



「銀山」と名付けられた直売兼食堂（左）、矢立山古墳群（右）

対馬の水産業

午後一番で長崎県対馬地方振興局水産課に伺い、市山大輔課長、山口功対馬水産業普及指導センター所長の2人から対馬の水産業について取材する。

戦後、水産業協同組合法が施行されると、対馬では1952（昭和27）年までに46の沿海地区漁協が誕生した。おそらく対馬島のほぼ各浦々に設立されたことになる。その後、合併が繰り返され、漁協数は年々減少、直近では伊奈漁協が今年4月に上県町漁協に合併されているので、現在の漁協数は11になっている。旧町単位では、厳原町に2漁協（厳原町、阿須湾）、美津島町に3漁協（美津島町高浜、美津島町、美津島町西海）、豊玉町に1漁協（豊玉町）、峰町に1漁協（峰町東部）、上県町に2漁協（上県町、佐須奈）、上対馬町に2漁協（上対馬南、上対馬町）という内訳だ。この他に業種組合として対馬真珠養殖漁業協同組合がある。

2021年度末現在、12の沿海地区漁協の組合員数は正准合わせて3,635人である。1983（昭和58）年当時の組合員数は7,900人、2000年度末の組合員数は6,103人（正：2,885人、准：3,218人）だった。したがってこの四半世紀の間にほぼ半減している。なお2018年漁業センサス時の漁業就業者数は2,285人であり、現在は2,000人を下回っているものと推定される。漁業・養殖業が島の基幹産業であった対馬においても漁業後継者の加入は少なく、漁業者は細る一方なのだ。

漁業者の減少は当然ながら島の漁業生産の縮小につながる。1982（昭和57）年の生産量は47,000トン、生産額は345億円であったが、2018年には量で7割減、金額で6割減となっている（最近のデータは公表されていない）。

2018年漁業センサス時に対馬島で営まれている漁業は、イカ釣（554）、一本釣（453）、曳縄釣（427）、採貝藻（414）、延縄（212）、刺網（138）、アナゴ籠などのその他漁業（119）、その他の網漁業（28）、小型定置網（129）、大型定置網（12）、マグロ延縄（10）、潜水機漁業（7）、中小型まき網（3）であった。（ ）内は2018年漁業センサス時の営んだ漁業経営体数を示す。つまり対馬島の漁業は釣りと縄、採貝藻が中心である。

一方、浅茅湾という静穏海域を有することから養殖業も盛んである。2018年漁業センサス時の営んだ経営体数は真珠養殖が40経営体と最も多い（後述するように直近では37経営体）。真珠養殖経営体のうち30経営体は母貝養殖も行っている。真珠に次ぐのがクロマグロ養殖の22経営体である。これにヒトエグサ養殖が16経営体、イワガキを含むカキ養殖が10経営体であった。魚類養殖ではマダイ、ヒラメ、トラフグが1～2経営体、ヒオウギガイなどのその他の貝類養殖を9経営体が営む。

イカ釣は対馬の漁業の中心で、とりわけ対馬の東海域で営まれている。このうち5トン以上の漁船が234隻であり、全体の4割ほどを占める。夏～秋にかけてはケンサキイカ、冬～春にかけてはスルメイカが漁獲対象だが、近年スルメイカは不漁が続いている。

一本釣や曳釣りの対象はヨコワ、サワラ、ヒラマサ、ブリなどである。ひところ漁獲量が多かったタチウオは近年大幅に減っている。マグロは比較的収益性の高い釣り対象だが、漁獲枠が決まっている。長崎県の30kg未満のマグロの漁獲枠は872.1トンであるが、このうち対馬の割り当ては416.8トン、30kg以上の大型は県全体が194.4トンに対し対馬は23.9トンである。大型マグロはオリンピック方式だが、小型は1人300kgの枠が設定されている。なおマグロの資源は近年増えている傾向にあるという。

大型定置網は現時点で実質的に13ヶ統が敷設されている。豆鮫には以前マルハ（大洋漁業）の定置網があったが、現在は豆鮫崎定置網組合に代わっていることはすでに述べた。定置網では主としてブリとヒラマサが漁獲されている。

中小型まき網は対馬東岸の芦見と比田勝にそれぞれ1ヶ統ずつの合計2ヶ統である。主な漁獲対象はアジ、サバ、マイワシなどだ。

延縄はアマダイ、クエ、アカムツが主たる漁獲対象である。

籠は主としてアナゴを対象とする。円柱状の籠で、小さなアナゴが逃げられるように籠の穴は13mm以上と定めている。少しデータが古いが、2013（平成25）年の対馬のアナゴ漁獲量は735トンで、全国の17%を占め、日本一の漁獲量を誇っていた。ちなみにアナゴ筒の餌はスルメイカが使われている。

海藻類は近年磯焼け状態が続いており、ヒジキは壊滅状態という。東海岸の一重ではアカウニを採っていたが現在はウニの餌がなくなっているため、やはり壊滅状態になっている。磯根資源で唯一獲れているのはサザエぐららしい。

対馬の養殖業はマグロ養殖と真珠養殖がメインであるが、この2つの養殖は後述する。



イカ釣漁船（左）、アナゴ籠漁業の筒（右）

マグロ養殖

現在、対馬でマグロ養殖を営むのは 23 経営体で、2018 年漁業センサス時よりも 1 経営体増えている。対馬におけるマグロ養殖は 1999（平成 11）年にスタートしており、およそ四半世紀が過ぎた。

養殖漁場は浅茅湾がメインで、この他にも三浦湾で数経営体が営む。マグロ養殖が最も盛んなのは美津島漁協尾崎支所で 10 経営体が営む。10 経営体のうち、島外資本は金子産業㈱、南西水産㈱（旧中谷水産、本社は大分県）、三島水産㈱（本社東京）の 3 社で、残りの 7 経営体は地元の経営体（全て個人経営）である。このほかに美津島町西海漁協（空港近くの海面）、三浦湾の鴨居瀬集落でマグロ養殖が営まれている。

尾崎地区では最初に中谷水産がクロマグロの養殖を始め、地元の人が技術を習った。島外資本が進出し、その技術を島民が習得して事業を拡大するという展開は、真珠養殖とも共通する。

マグロ養殖の種苗は天然のヨコワで、人工種苗を入れている業者はいない。種苗は地元の曳縄釣りの漁業者から購入している。種苗の価格は 4,000 円／尾前後で推移していた。2021（令和 3）年は 5,000～5,500 円に値上がりしたが、その後、元の水準に戻っている。

マグロ養殖の生簀は直径 20m の円型が基本で、直径 30m のひとまわり大きい生簀を使用する業者もいる。1 基の生簀に稚魚を 500～600 尾／基収容し、成長とともに収容尾数を減らし、最終的な収容密度は 300 尾／基ほどにする。出荷サイズは 30 kg から 100 kg であるが、業者によってまちまちである。標準的出荷サイズは 40～50 kg の範囲らしい。

マグロの餌は、幼魚の段階ではイワシやイカナゴ、大きくなると冷凍サバが中心になる。ただ、金子産業の場合はモイストペレットを用いている。個人経営体では西山さんだけがモイストを使っているが、今後、2 社がモイストペレットに切り替える予定らしい。漁協の建物の裏にペレッター用の機械が置かれていたから、近々、導入されるのだろう。

大手の企業経営は地元を中心に雇用しているが、個人経営体の場合は基本的に家族労働で、忙しい時に地元から雇用するケースもある。

2013（平成 25）年時点における対馬のマグロ養殖生産量は 1,463 トン（県全体 3,000 トン）であった。2018（平成 30）年は 1,826 トンで、若干、生産量は伸びている。しかし県全体では対馬以外の産地の伸びが大きく、6,502 トンになっており、この時点では長崎県全体に占める対馬島のシェアは 28.1% に低下している。相対的にみると、対馬のマグロ養殖は、伸び悩みという状態にあるようだ。



空港近くのマグロ養殖の生簀（左）、尾崎地区のマグロ養殖施設（右）

曲の集落

振興局で対馬の漁業を取材してから、巖原郊外にある曲の集落に向かう。宮本常一によると、曲は対馬で最も古い漁村とされている。

巖原の市街地から巖原トンネルを抜け、細い道を海に下ると、阿須浦に出る。この阿須浦の最も奥まったどんづまりに^{まがり}曲（120 戸、176 人）の集落がある。集落の中心に「曲生活館」と呼ばれる地区の公民館があり、その周辺は広場になっており、駐車スペースも兼ねている。集落は谷あいにも密に形成されており、田畑はなく、典型的な純漁村である。

曲の祖先は筑前国・鐘崎村の出身で、宗家が中世の時代に筑前を領有していたころ、海を渡るにあたって水夫として働いた特権として、阿須湾一带を中心に対馬周辺の漁業権が与えられていた。

彼らはもともと^{えぶね}家船で生活していたが、そのうちに小屋掛け生活をするようになり、やがてこの地に定住するようになった。宮本常一によると、定住したのは 1722（享保 7）年ごろのこととされている。定住を余儀なくされたのは、女がアワビの採取を専業とするようになり、男は網漁に従事するとともに捕鯨の羽差として雇われるようになったことによる。こうして曲の男たちと女たちが一緒に一つの船で稼ぎまわるとは次第に減ってくると、曲の家船は次第に解体し、男は男で稼ぎ、女は女で稼ぐようになった。

そのうち、曲の男たちが「^{さしびと}差人」として巖原の城下で暮らすことが多くなってから、年中、海に生きるのはいよいよ女のみといってもいいまでになったという。差人というのは藩の命令によって巖原に呼び出され、府下の家々に仕えて下男同様に使役されるもので、期間はだいたい 1 年で交代した。

1986（明治 19）年には曲漁業組合が設立される。この時の創立者の碑が広場の山側に建っているが、曲の 47 戸が加入し、これらが「本戸」と呼ばれ、漁業の特権を得ることになる。

このように曲は歴史のある漁村であるが、現在の漁業就業者は 5 年前の 2018 年時点で 26 人であったから、現在はさらに減少しているだろう。しかも 26 人のうち 65 歳以上が 18 人を占め、その後に新規就業者がなければ、ほぼ高齢者だけになっている勘定だ。同漁業センサス時の経営体数は 25 経営体で、イカ釣 10、曳縄釣 6、一本釣 6、採貝藻 3 という内訳であった。もはや曲の漁業集落は風前の灯となっている、



阿須港漁港と曲の集落（左）、曲生活館と曲集落の広場（右）

万松院

^{ばんしょういん}万松院は対馬藩第 2 代（宗家 20 代）の宗義成が父親の初代藩主（宗家 19 代）の^{よしとし}義智の

冥福を祈って 1615（元和元）年に建立した宗家の菩提寺である。父君の法号にちなんで万松院とした。宗旨は天台宗である。寺はたびたび火災に会い、現在の本堂は 1879（明治 12）年に建てられたものだ。ちなみに宗義智は小西行長の娘マリアと結婚し、自らもダリオという洗礼名をもつキリシタン大名であった。義智は、朝鮮出兵（文禄・慶長の役）、小西行長の処刑、キリスト教の棄教、マリアとの離別、朝鮮との和平交渉など苦難に満ちた生涯を送った人物である。ただ、朝鮮との国交回復の功を徳川家康に認められて初代藩主となった。

山門は同年に建造されたもので、両側に仁王尊が立つ。脇に入口があり、拝観料 300 円を払って中に入る。百雁木と呼ばれる 132 段の石段が幽玄な杉林の間を上へと延びていた。

階段の中間あたりの中御霊屋^{なかおたまや}と下御霊屋とよぶ墓所がある。中御霊屋には貞茂以降 3 代が居を構えた峰町の佐賀から巖原町に府を移し、中村に館を築いた宗氏 10 代貞国と側室や最後の藩主で版籍奉還後に巖原県知事となった 33 代義達^{よしあき}の弟などが祭られている。下段には城下町を整備した 21 代義真^{よしざね}の側室などが祀られている。墓石は何れも花崗岩製の五輪塔で、貞国のみが砂岩の宝篋印塔である。

上御霊屋は最も高い場所に設けられている。沢で東西に分かれた敷地には、宗家 19 代から 32 代までの藩主（当主）とその夫人や子供の墓が並ぶ。上段の墓はすべて砂岩で作られた宝篋印塔である。中でもひととき大きな墓石は寺を造営した本人である義成と同夫人のものである。義成は「柳川事件」（国書偽造事件）の藩主で、日朝修好体制を確立させ、佐須銀山の開発と藩政の基盤づくりを成し遂げた。それと同じ大きさの墓が^{さききばら}棧原城の築城と金石城の拡張、後述するお船江などを建設、城下町整備を敢行した対馬藩中興の祖ともいえる第 3 代藩主義真と同夫人のものであり、格別に大きく威容を誇る。

墓所の上段には万松院創建以前からあったといわれる大杉（高さ 35～40m）3 本がそびえていた。ただし 1 本は枯れていたと思う。雨がぱらついてきた。墓所内では誰にも会わなかったが、山門の近くまで戻ると 14～15 人の日本人団体客が入ってきた。



灯籠が並ぶ百雁木（左）、宗義成夫妻の墓所（右）

対馬の林業

続いて近くにある対馬市役所を訪ね、水産課と林業課で簡単に話を聞く。水産課ではたいした情報を得られなかったが、林業課では「対馬管内林業の概要」という冊子をいただき、説明を受ける。なお林業課は実務を県の対馬振興局が代替しているようだ。

対馬の森林面積は 63,155ha で、島の面積の 89%を占める。このうち国有林が 5,028ha、民有林が 58,127ha である。森林主は 2,082 戸である。人工林の森林資源は、面積ではヒ

ノキが 10,941ha と最も多く、これにスギの 7,715ha が続く。ただ材積で見るとスギの方が上回り 4,170 千 m^3 、ヒノキは 2,840 千 m^3 であった。スギ、ヒノキの他にはマツが少しある。

木炭の生産者は 11 戸、椎茸の生産者は 307 戸である。シイタケの生産量は年々減少傾向にあり、令和 3 年は乾燥シイタケが 19,958 kg（原木換算）で 1.10 億円、生シイタケが 49,757 kg（原木換算）で 0.72 億円、シイタケの生産金額は合わせて 1.82 億円であった。令和 3 年の木炭の生産量は 22,111 kg（原木換算）で、生産額は 620 万円とわずかである。

同年に伐採した材積は 62,691 m^3 で、間伐が 44,726 m^3 、主伐が 17,965 m^3 の内訳だった。



杉木立の林間に伏せられたシイタケのほだ木（左）、伐採された杉の丸太（右）

市役所で取材してから、対馬交流センターの 5 階にある対馬市立図書館を訪ね、旧 6 町の町史を調べ、必要な箇所をコピーした。

日本ミツバチ

対馬を始めて訪れた時に最も印象に残ったのが、道路脇や山の斜面などいたるところに見られた蜂洞であった。この得体の知れないものが何なのかわからなかったので、地元の人に聞くとニホンミツバチの巣箱だという。木をくりぬいた洞に分蜂したニホンミツバチを導き、秋に蜜を回収する。

漁業関係者との懇親会（漁協合併か何かの研修会に講師として招かれた時のことだと思う）に引き続き、巖原のクラブにご招待いただいたのだが、そこで隣り合わせた女性からこのニホンミツバチの蜂蜜をいただいた。いたく感激し、自分でも日本ミツバチの蜜をとろうと考え、さっそく、厚木に戻ってから見よう見まねでこの蜂洞をつくったのである。丸太をチェーンソーでくりぬき、5月の連休ころに裏山に設置した。

思い立ったのには伏線があった。今は分譲地になって家が立ち並ぶ「みはるの団地」が造成されているころ、山を歩いていた時に大量のニホンミツバチを見つけたのである。このことが印象に残っていて、厚木にもニホンミツバチが生息していると確信していた。そして偶然にも蜂洞を設置して1週間とおかず、分蜂群が設置しておいた巣箱に入ったのである。ただ途中で逃亡したため回収できた蜂蜜は僅かであったが、以来味をしめて、いろいろと勉強を重ね、今では重箱式の巣箱で、毎年、ニホンミツバチを飼っている。

ところが今回久しぶりに対馬島にでかけて驚いた。当時とは比べものにならないほど蜂洞の数が激減していたのである。少し調べてみると、現在、対馬のニホンミツバチは大きな危機に直面しているようなのだ。気温の上昇に伴って本来は東南アジアを分布域として

いたツマアカスズメバチという外来種が入り込み、その攻撃を受けてニホンミツバチが減少しているらしい。ツマアカスズメバチは俊敏で、かつ長時間のホバーリングが可能なことからニホンミツバチは集団で捕らえてスズメバチを熱殺することができないらしい。またサックブルト病というウイルス性の病気もじわじわ広がっているという。

こうした影響もあってか、農産物の直売所でニホンミツバチの蜂蜜は売られていない。唯一見つけたのは「ふれあい処つしま」の売店であった。しかしべらぼうに高い価格で売られていた。私が最初にニホンミツバチを認識した時点の小売価格は 100 g あたり 1,000 円でありこれが対馬の相場であったが、今回見たものは 30 g で 1,400 円に跳ね上がっていた。しかも少量パックで、販売量は極端にすくない。



道端に置かれている蜂洞（左）、島内の土産物店で売られている日本ミツバチの蜂蜜（右）

令和 5 年 9 月 1 日

金石城跡

8 時に東横イン対馬巖原を出発し、宗家の居城であった金石城跡を訪れた。あいにく朝から雨が降っている。大手門（櫓門）を抜け、背後の空き地に車を停める。この大手門は 1990（平成 2）年に再建されたものである。

北部九州にいた宗重尚がこの島に渡ったのは 1245（寛文 3）年のことであった。重尚に始まった宗家は 2 代目助国の時に元寇に遭遇、3 代目盛明の時に再び蒙古の来襲を受けるが、博多でこれを防いだ。4 代目盛国を経て、5 代目経茂は高麗との通交を始め、6 代目頼茂の時に初めて北部九州より対馬志賀に移り住んだ。宗賀茂の乱にあって九州に帰り、7 代目貞茂が賀茂を打って対馬の佐賀に居住した。宗家はもともと九州北部に広い領地を持ち、対馬はその出先だったが（対馬は農地が少なく、米がとれない）、8 代目貞盛に至って北部九州の領土を失い、対馬一国に閉じこもることになったのである。

金石城は 1528（享禄元）年築城された。宗家の内紛で「池の屋形」が消失したため、宗家 14 代宗将盛^{まさもり}がこの地に築いたものだ。この場所は中世に再興された国分寺の跡地だったと推定されている。江戸時代に入り、3 代目藩主宗義真^{よしざね}が国分寺を移転させて城が拡張され、1669（寛文 9）年に櫓門、石垣を整備している。義真は城下町の北側、^{さききはら} 棧原に棧原城を築き、棧原城を居城、金石城を政庁として公私を区別していたともいわれている。さらに 1690～1993（元禄 6）年にかけて心字池（現在の金石城庭園）を整備している。心字池は 1997（平成 9）年から発掘調査が開始され、その後復元整備されて、現在は金石城庭園になっている。

1811（文化 8）年に朝鮮通信使の易地聘礼（江戸まで行かずに対馬で国書の交換を行う）

が行われるにあたり、金石城が幕府上使・小笠原忠^{ただかた}固の宿舎になったことから、再び拡張整備が行われた。

なお現在、城跡は巖原体育館、清水が丘多目的広場になっており、上述した旧金石城庭園だけが残る。御殿は現在の多目的広場の場所にあったようで、ここから多数の遺構や遺物が発見されている。

旧金石城庭園の手前には「李王家宗伯爵家御結婚奉祝記念碑」が建つ。朝鮮国王高宗の娘・徳恵^{たけゆき}姫が旧対馬藩主の宗武志伯爵のもとへ嫁いだことを記念し、1931（昭和6）年に島内の朝鮮人によってつくられた記念碑である。戦後、2人は離婚し、記念碑も撤去されていたが、2001（平成9）年に復元されたものだという。

金石城の水堀の役目を果たしたのが金石川で、ここには全長 300m、高さ 5～6 m の石垣が築かれ、当時のものが現存している。鏡石積みとも称される巨石を多用している点がこの石垣の特徴とされる。



1990年に再建された大手門（左）、金石川沿いにつくられた城石（右）

お船江跡

金石城跡から対馬藩の御用船の船着場である「お船江」跡を見に行った。しかし地図にはその位置が出ていないため、場所がわからない。久田漁港の一角にある巖原漁協の荷捌場で道を聞き、久田川河口へ向かう。お船江跡は久田川の河口部北側を掘りこんだ、現代でいうところの掘り込み港湾である。4本の突堤がつくられていた。突堤は石積みで、ほぼ当時の原型を保っていた。この船着場は1663（寛文3）年につくられたものだ。ちょうど金石城が拡張整備された時期に相当する。

栈橋の間は満潮時には木造の大船が出入できるほどの広さと深さがあり、干潮時には干上がるようになっていくという。つまりドック（船渠）にもなっている。このお船江跡は船の係留と修理、造船場を兼ねた場所だったのであろう。

雨で草が水に濡れているため、自由に歩くのが難しかったから、対岸から突堤を見たのだが、陸上には造船場があり、船大工や水夫たちの納屋や正門、倉庫、休息の建物跡が残っているようだ。この場所は長崎県の史跡に指定されている。

周囲を海に囲まれた対馬にとって、船はきわめて重要な交通手段であった。朝鮮半島との通商、参勤交代などの本土との行き来、あるいは島を回るにしても陸路に行くよりも船の方がよほど効率的であったに違いない。したがって対馬藩は多数の船を保有し、造船の需要も高かったものと思われる。



お船江跡の突堤とドック（左）、お船江跡脇に流れ込む久田川（右）

真珠養殖

厳原港背後の高台に対馬真珠養殖漁業協同組合（以下対馬真珠漁協）の事務所が置かれている。お船江跡を見てから、事務所に向い、村上街子参事に真珠養殖について取材する。この対馬真珠漁協は 1961（昭和 36）年に結成されている。事務所には参事の他に、男女各 1 名の若手職員が働いていた。

現在の対馬真珠漁協の組合員数は 37 経営体（法人が 12、個人が 25）である。ピーク時の組合員数は 97 経営体であったので、ざっと 1/3 に減少したことになる。大手は北村真珠のみで、ここだけが島外資本になる。なお大手の島外資本としては太洋真珠が進出していたが、後述するように倒産している。

通常、母貝養殖と真珠養殖は分業化されているが、対馬の場合は同一業者が母貝養殖と真珠養殖を一貫生産している。天然採苗は行われておらず、種苗は全て人工種苗である。種苗を生産しているのは豊玉地区にある栽培漁業センターと北村真珠、平井真珠の 3 機関である。この 3 機関でつくられた種苗を各養殖業者は母貝に育て、核を挿入して真珠を生産している。

かつて北村真珠が大漁湾（曾集落）で真珠養殖を営んだ時期もあったが、現在ここは撤退しており、対馬の真珠養殖漁場は全て静穏な浅茅湾が養殖場になっている。採苗は 4 月ごろで、1 年以上母貝を養成し、挿核する。挿核後 1 年以内に取り上げた真珠を「当年もの」、13 ヶ月以上養殖したものを「越もの」と呼んでいる。

真珠養殖業は後述するように対馬最大の産業に発展し、繁栄を謳歌した時代もある。しかし、現在、37 経営体が雇用する従業員は 400 人ほどに縮小している。かつては関連する産業を含めると数千人以上の雇用効果があったとされる。

1991（平成 3）年に大玉の価格が大幅に下落、1994（平成 6）年には夏季の高水温でアコヤガイの斃死が多発、さらに 1996（平成 8）年には赤変病による大量斃死が発生した。この結果、多くの経営体の離脱が相次いだのであった。

対馬の真珠養殖業は 1991（平成 3）年の 100 億円超がピークで、この当時はわが国真珠養殖生産額の 10% を占めていた。愛媛、三重に次ぐ産地に成長し、長崎県の生産額の半分以上を占めるまでになった。しかし真珠不況とアコヤガイ斃死に伴う組合員と生産額の減少により、数年前までは 15 億円前後に落ち込んでいた。ただ、2 年前から需給関係がひっ迫し、真珠価格は 2 倍ほどに跳ね上がった結果、現在、対馬の真珠生産額は 25 億円ほどに回復している。

巖原の街に夜、夕食を食べに入った居酒屋では、偶然、対馬真珠漁協の若手組合員が宴会を開いていたが、景気回復を反映して、宴は盛り上がっていた。

ここで対馬島における真珠養殖の歴史を振り返っておこう。

対馬の浅茅湾にはもともと天然のアコヤガイが生息しており、江戸時代からアコヤガイを採取して真珠を採っていた。ただし、真珠は漢方薬として使われていたようだ。

天然のアコヤガイが生息し、浅茅湾という静穏海域に最初に着目したのが、三重県出身の北村真珠であった。北村真珠は 1901（明治 34）年創業の伝統的企業である。1913（大正 2）年に対馬に新たに真珠養殖場を開拓するために現地調査に入り、1921（大正 10）年に北村幸一郎が大船越に養殖場を開設し、対馬における真珠養殖の草分けとなった。1934（昭和 14）年には大山にも養殖場を開設、さらに濃部^{のぶ}、舟志湾^{のおおます}などにも養殖場を開発した。このように戦前の対馬は北村真珠の独占場であった。

戦後、1951（昭和 26）年に長崎に本社のある大洋真珠が対馬に進出し、竹敷、箕形、犬吠^{いぬぼえ}の 3ヶ所に養殖場を開設した。しかし、大洋真珠は 2001（平成 13）年に倒産している。

一方、1952（昭和 27）年ごろから対馬土着の人々の中に真珠養殖に取り組み人々が現れてくる。その嚆矢が斎藤滋夫、幾度保美、印東隆之、村瀬喜代太の 4 氏だったといわれている。斎藤滋夫は対馬真珠漁協の初代組合長となる人物である。そして 1955（昭和 30）年を過ぎると、各部落の人々に真珠養殖への着業意欲が高まってくる。もともと浅茅湾沿岸の寒村は農地が少なく農業だけで食べていけなかった。そして漁業も湾内の零細な磯根漁業が中心だったから、多くの島民は真珠養殖に活路を見出そうとしたのだった。

時は高度経済成長期にあたり、真珠の需要は高まり、輸出も盛んになったから、浅茅湾を中心とした集落の人々はこぞって真珠養殖に進出する。浜を回って気が付くことは寒村に豪邸が多いことだが、これらはみな「真珠御殿」なのである。



嵯峨地区の真珠養殖の作業場（左）、浅茅湾の真珠養殖施設（右）

対馬博物館

2 年前に来た時、対馬博物館は工事中だった。2022 年 4 月 30 日に開館しているので、まだ 1 年ちょっとしか経っていない。博物館は道路を挟んだ対馬市役所の反対側に位置している。この博物館の前身は 1978（昭和 53）年に開館した県立対馬歴史民俗資料館である。2020 年 3 月末で閉館し、2 年の歳月をかけて新たに建設されたものだ。

大手門をくぐった先が広い空き地になっており、ここに車を停めて博物館に入る。エントランスホール手前のギャラリーやミュージアムを利用するのは無料であるが、平常展示

エリアは有料で、入館料 550 円が必要である。

さすがに新しい博物館だけあって展示スペースは広く、展示方法や解説も洗練されている。館内は時代ごとに区分され、総合、古代、中世、近世、近現代に分かれている。無料のギャラリーでは対州馬展が開かれていた。

入ってすぐのところに満山釣針が展示されていた。対馬藩の大砲方であった満山俊蔵が鑄砲技術を釣針製造にかえ、漁師の言い分をよく聞いて工夫したつくったものだ。現在は制作されていないが、典型的な製品だけでも 35 種類あるといわれている。この釣針について宮本常一は次のように紹介している。

対馬の沿岸をあるいていると一本釣の漁師たちから満山鉤のことをよくきかされる。先がするどく尖っていて、焼がかたくてつよい。そのうえ型がよくて魚のかかりがいい。老年の漁師たちはこの鉤に信仰的な執着さえ持っていて実に大切にしている。使用しない時は油などひいてしまっておく。なるほど他の釣針とくらべてみると断然ちがう。名刀を思わせるものがある。

現近代の展示はすこし貧弱である。ただ注目したのは、現在の日本離島センターの季刊誌「しま」の創刊号（昭和 28 年 12 月発刊）が置かれていたことだ。この中で宮本常一が「しおざい」というコーナーに「島の文化」について書いていた。

博物館の 2 階には長崎県対馬歴史研究センターになっている。ここは宗家文庫資料をはじめとする歴史資料を用いて対馬の歴史に関する調査研究をするとともに、宗家文庫史料等の歴史資料の修理を任務としている。



対馬博物館の入口（左）、対馬でつくられた各魚種別の満山釣針（右）

対馬朝鮮通信使歴史館

対馬博物館から 3～4 分ほどの金石川沿いに対馬朝鮮通信使歴史館がある。同館は対馬博物館の分館として半年早い 2021 年 10 月 30 日のオープンしている。入館料は 220 円である。

この歴史館は「朝鮮通信使に関する記録」（登録資料 111 件 333 点、日本側：48 件 209 点、韓国側：63 件 124 点）がユネスコの「世界の記録」に登録申請された 2017（平成 29）年 3 月に対馬市の町づくり団体が「朝鮮通信使によるまちづくり」を提言したことを契機に構想されたという。

朝鮮通信使と対馬の人々の関わりをわかりやすく解説した「朝鮮通信使～対馬の誠信交隣」という約 9 分の映像を「ガイドダンスシアター」で観た。展示室には、朝鮮通信使と対

馬、朝鮮通信使の旅、朝鮮通信使対馬易地聘礼、^{あめのもりほうしゅう}雨森芳州と朝鮮外交、文化交流、朝鮮通信使と民衆などのコーナーに分かれて展示されている。なお朝鮮側から借用した資料が展示されているという理由で展示物の写真撮影は禁止されていた。

朝鮮通信使は室町時代から江戸時代にかけて、朝鮮国から日本に派遣した外交使節団である。使命は両国の交隣関係を維持するため、朝鮮国書を日本に届け、日本国書を朝鮮に持ち帰ることであった。豊臣秀吉の朝鮮出兵によって断絶した国交を回復し、両国間の平和構築と維持に寄与した江戸時代の朝鮮通信使の役割は大きい。

16世紀末の文禄・慶長の役で中断していた両国の関係は江戸時代になると、1607（慶長12）年に朝鮮通信史による交流が再開され、以後、第12回の1811（文化8）年まで続けられた。約200年間に12回来日していることになる。朝鮮通信使一行は総勢400～500人にのぼる大使節団であった。

釜山を出発した一行の最初の寄港地が対馬だったのである。北端の佐須奈ないし鱒浦に入った後、府中（現在の厳原）を経て、壱岐島の勝本、^{あいのしま}相島、下関に入り、瀬戸内海を上関（山口県）、蒲刈島（広島県）、鞆の浦（広島県）、牛窓（岡山県）、室津（兵庫県）を経て大阪に着き、淀川をさかのぼって、以後、陸路を江戸に向かった。道中では諸藩が厚く歓待し、詩文や絵画の交換などの文化交流も盛んにおこなわれた。



対馬朝鮮通信使歴史館の外観（左）、朝鮮通信使の絵巻（右）

藻食性魚類の有効活用と藻場再生

近年の海水温の上昇によって西日本各地で「磯焼け」が広がっている。大型海藻を餌とするアワビ類はほとんど獲れなくなり、同様にウニ類の漁獲量も減っている。さらにヒジキも食べ尽くされ、採貝藻漁業は壊滅的ダメージを被ってきた。

この原因は比較的高水温を好むアイゴやイスズミなどの藻食性魚類が長期にわたって対馬沿岸に定着し、海藻類への食圧が高まっていることが原因とされる。以前であれば、夏の一時期だけ回遊してきて、水温の低下とともにいなくなったのが、周年にわたって定着するようになってきているのだ。海藻類の周囲をネットで囲い、それら魚類によって食べられなくすることで海藻が保全できていることから、磯焼けの原因は水温上昇そのものではなく、藻食性魚類の食圧が根本原因であることが分かっている。したがって磯焼けを回復させるためには、藻食性魚類の資源量を減らすことが重要な戦略ということになる。

対馬では、「水産多面的機能対策事業」によって「磯焼け」の原因である藻食性魚類の駆除を行ってきた。しかしアイゴやイスズミは市場価値が低く、獲った魚は利用されることなく廃棄されていた。ただ魚食は地域による差が大きく、沖縄県ではアイゴはよく食べ

られているし、イスズミも伊豆諸島では島寿司のネタとして利用されてきた。つまり魚食は保守的なだけで、食べれば美味しい魚もあり、「食わず嫌い」なのである。

県振興局水産課でこの取り組みの情報を得ていたので、昼食はアイゴとイスズミを食べるべく、空港近くの「肴やえん」に行った。

この食堂は、干物やイカの加工品を作る地元の水産加工会社・丸徳水産(有)が経営している。食堂は 14 年前に始めた。アイゴやイスズミの魚食化を始めたのはこの会社の代表取締役専務の犬東ゆかりさん (58 歳) である。

店では「そう介のメンチカツ」(イスズミのミンチで 2019 年のフィッシュワングランプリで日本一を獲得している) と「アイゴフライ」の定食を注文した。たまたま対応してくれた人がこの「そう介プロジェクト」の仕掛け人であるゆかりさんであった。話を聞きながら、ランチを食べる。アイゴもイスズミも油と相性がよく、美味であった。

対馬にはもともとアイゴやイスズミが生息していたが、夏の一時期だけのことで、水温の低下ともいなくなった。しかしこの 15 年ほど前からは周年にわたって定着し、その結果、海藻類が食い荒らされる事態となっていた。そのため駆除が進められたが、市場価値がないために捨てられていた。海の恵みを活かそうと、ゆかりさんが発想したのが「そう介プロジェクト」である。このプロジェクトの由来を次のように述べている。

「イスズミを捕獲し、食することで海そう(藻)を増やすことを目指す。海藻が増えることにより魚の住かが増え、漁民も魚もそう(相互)にようになる事を願って。丸徳水産が、そう(創)意工夫して、美味しいそう(惣)菜にかえる。たくさんの方の(思)いを寄せて頂き、このそう(壮)大なプロジェクトが成功することを願って。」

2019 年のグランプリ受賞を契機に本格的な取り組みが始まった。全島からイスズミとアイゴを集める。島の南はアイゴが多く、北はイスズミが多い傾向で、特に北のイスズミはサイズが大きいそうだ。当初は漁師の取り扱いが悪く鮮度がよくなかったが、事業が軌道に乗り始めると漁師も本気になり高鮮度のものが集まるようになる。主として定置網に入るものが中心だが、現在は加工場まで運んでくれるようになっている。対馬市や学校関係者の理解も進み、食堂の他に島内の小中学校の学校給食などにも積極的に活用されている。



藻食性魚類を提供する肴や・えん(左)、アイゴとイスズミのフライ定食(右)

昼食を食べてから美津島漁協の近くにある丸徳水産(有)の加工場を訪ねた。ちょうどイスズミの加工処理をしていて、息子さんに大きなイスズミを見せてもらう。ゆかりさんのご主人(社長)によると、全く姿を消していたヒジキが駆除活動のおかげで 2021 年は 600 kg(乾燥重量)、2022 年は 400~500 kg 収穫できたという。なお加工残滓は堆肥に加工して

農業用肥料にしている。また息子さんは最近、「体験ツアー」を始め、磯焼けの現場を見せるなどの環境教育活動にも取り組んでいるらしい。

和多都美神社と烏帽子岳展望所

対馬博物館と対馬朝鮮通信使歴史館を巡って、昼食後、嵯峨地区にある前組合長の職にあった平井義正さん（78歳）の作業場を訪ねた。

美津島町漁協から国道 382 号に出て、豊玉町に入る。県道 39 号との分岐から 3 kmほど進むと大きな赤い鳥居が道路上に立っており、その先に和多都美神社がある。ここは浅茅湾北岸に面している。

拝殿前から並ぶ 5 つの鳥居のうち 2 つが海中にあり、広島の大島神社を想起させるような神社である。この神社は「延喜式神名帳」に出てくる古い神社で、この地に竜宮があり、祭神の山幸彦と豊玉姫が出会ったとされる。

神社から坂道を登った先に烏帽子岳展望所がある。標高は 176m だ。頂上付近までは車で登れるが、最後は階段を 150 段ほど歩かなければならない。かなりきつい石段が続く。

頂上からは浅茅湾を 360 度見渡すことができる。壮大なリアス式海岸が一望される。ただしガスがかかってきた。風向きによってガスが吹き飛ばされるので晴れ間を見計らって写真を撮った。



海に続く和多都美神社の鳥居（左）、烏帽子岳展望台からの浅茅湾の眺望（右）

浅茅湾北岸の集落

対馬博物館と朝鮮通信使歴史館を巡って、昼食を食べ、嵯峨地区にある前組合長の職にあった平井義正さん（78歳）の作業場を訪ねる。

嵯峨（17 戸、31 人）の集落は浅茅湾の北岸にあたり、細長い入江の奥にある。農地はほとんどなく背後に山が迫る。多い時にはこの集落で 10 戸が真珠養殖を営んでいたが、現在は平井さんを含めて 2 戸に減っている。平井さんは一代で見よう見まねで真珠養殖を始めた苦労人で、自らアコヤガイの人工種苗生産にも成功し、種苗を自給するとともに販売もしているようだ。息子さんも後を継いでいる。

嵯峨から南に下った先が貝鮓（11 戸、21 人）の集落で、西側が佐志賀（21 戸、46 人）の集落である。この 2 集落はともに真珠養殖がさかんであった。多い時には貝鮓で 6 戸、佐志賀で 12 戸が真珠養殖を営んでいた。

来た道に戻り、糸瀬（13 戸、36 人）の集落を抜ける。糸瀬も多い時には 6 戸が真珠養殖を営んでいた。この嵯峨、貝鮓、佐志賀、糸瀬の 4 つの集落はほぼ一体で、一時期は真

珠養殖で大いににぎわったのである。

和多都美神社への大きな赤い鳥居をくぐり、県道 232 号に出る。糖という地名があったが、人は住んでいないようだ。次の集落が**卯麦**（45 戸、93 人）で、川沿いに二手に分かれて人家が並ぶ。後背地の川沿いに農地があり、半農半漁の生活だったと思われる。海沿いに「TsushimaKim」と書かれたフィッシングペンション（船宿）があった。キムとあるから韓国人相手の釣り宿かもしれない。

次の集落が**貝口**（15 戸、25 人）で、干潟が現れた湾内にはボートが 1 隻あっただけだった。背後の雇地では農業が営まれていたと思われるが、現在は耕作放棄されている。

続く集落が水崎である。浅茅湾港の大口瀬戸に位置し、同湾に面する集落では最も大きい。行政的には東から**東加藤**（33 戸、52 人）、**水崎**（54 戸、118 人）、**加志々**（28 戸、52 人）に分かれているが、集落は一体で、道路に面した山際に带状に形成されている。

水崎はもともと広島から季節的に漁業に訪れていた人たちが住み着いた集落である。水崎の現在の集落が形成されるのは明治 30 年代からで、はじめは漁期にだけ出漁してきた他県船の漁船が次第に定着し、また近隣の村から出てきた人も加わって、大正期にはかなり大きな集落を形成するようになった。1960（昭和 60）年当時の 3 字の世帯数は 140 戸、人口は 812 人であったから、人口は 1/4 ほどに減少している。

ここは 2005 年ごろにクエの漁業の調査で訪れたことがある土地だ。対馬におけるクエ延縄漁業の発祥の地であるとともに、最大の産地であった。対馬の延縄漁業はこの水崎の広島出身者によって普及されたのである。漁港は 3 つに区画されており、それぞれの集落が区分して使っているようだ。漁協の事務所も当時のままあった。

水崎まではいい道路が続いていたが水崎を過ぎると、車がすれ違うのも困難な狭く曲がりくねった道路に変わった。峠を越えると外海になり、最初の集落が**唐洲**（39 戸、92 人）である。唐洲湾の湾奥に位置する漁港にはイカ釣り漁船 5 隻、磯船 7 隻が置かれていた。峠を下った先の谷戸は農地だったと思われるところがあったが、すでに耕作放棄されている。少し離れたところに漁港があり、家が数軒見られた。かつて鯨組の基地があった妙見の集落と思われる。



水崎漁港の釣り漁船（左）、廻の集落と廻漁港（右）

半島の先端が**廻**（39 戸、76 人）集落である。浅茅湾の反対側の外海に面する。小さな川沿いの谷筋に形成されている。人口のピークは 1964（昭和 39）年の 324 人で、世帯数は 56 戸であったから、こちらも過疎と高齢化が進んでいる。廻漁港には定置網を営んでいると思われる漁船 2 隻係留されていた。1 つは中庭水産術という会社のようだ。定置網

の漁船以外では磯船が 10 隻ほど係留されており、この集落のメインの漁業は定置網と思われる。

対馬の捕鯨

廻の集落に向かう手前の椿林に江戸時代に捕鯨に従事した人たちの墓があった。手入れがされていないので、墓石はひっくり返り、荒れている。現在残っている墓石はおよそ 13 基、他に棹のない台石が 10 ヶ所ほどにある。墓標に記された碑銘には、出身地と俗名、戒名、没年が記されているが、島外のものが多い。

廻浦は延宝年間（1673～1681）より鯨組の捕鯨基地になり、服部・土肥などの鯨組が春納屋を設けて操業したが、その後中断し、天保年間（1830～1844）は藩直営の御手鯨組が設立される。その後を請け負った亀谷卯右衛門の鯨組が繁盛して、幕末の廻浦はにぎわいを呈したという。

対馬は子を産むために南下し、餌を求めて北上する鯨の回遊ルートにあっていたので、廻以外にも巖原、伊奈、芦ヶ浦などに鯨組の基地があった。伊奈と廻は子供を産みに南下して来る鯨を対象とした冬網、芦ヶ浦は餌を求めて北上する鯨を対象とした春網だったようだ。獲れた鯨の種類はセミ、ナガス、ザトウ、タカマツなどである。

対馬で古式捕鯨（網捕り法）が行われたのは 17 世紀後半から明治初期までの約 200 年間であった。捕鯨の経営者は基本的に島外の人たちで、壱岐島や五島の小値賀島などからやってきた。また羽差や鯨を追い込む双海船の乗組員などの専門技術者は壱岐、五島、北部九州、瀬戸内海（周防灘や豊後灘）などからの出稼ぎ漁業者であった。ただ例外は上述した曲の集落の男たちで、彼らは潜水技術に長けていたから羽差などの役割を演じた。

鯨組と地元民との通交はほとんどなく、地元民が関わるのは鯨が捕獲された時の肉さばきなどの納屋作業が中心であった。

捕鯨はこうした特殊な技術者の存在なしには成立しなかったからきわめて重要な立場にあった。しかし羽差を中心に極めて危険が伴う労働であったから、しばしば事故死する人もあったのである。しかもその人たちは島外の人たちであった。このため異郷で亡くなった人たちは現地で茶毘に付され、地元の墓に祀られた。



廻集落の手前の椿林内の鯨組墓地（左）、戒名と出身地、名前などが記された墓石（右）

その墓が放置されて椿林の中に残されていた。今回確認したのは廻の鯨組墓地であるが、上対馬町史によると、巖原にも鯨組の墓地があるそうで、町史には碑のあるものが 12 基、石積のものが 14 基あると書かれていた。

廻から来た道に戻り、旧豊玉町の中心地である仁位に出て、国道 382 号に合流。対馬空

港に直行し、レンタカーを返却。17 時発のANA便で福岡空港に向かった。夜は博多で若いころの同僚である益原、村上の両君と会い、旧交を温めた。

【2021 年 9 月調査分】

2021 年 9 月に赤島・泊島、沖島、島山島を訪れた折に、浅茅湾南岸を中心に調査しており、以下にその時の訪問記を記す。

下島西岸（小茂田～阿連）

厳原から佐須坂トンネルを抜け、佐須川沿いを下って、西海岸の小茂田に出る。小茂田は西海岸で唯一の砂浜があり、江戸時代の干拓で埋め立てられたがかつては大きな入江があり、西海岸の重要な港だった。現在は佐須川の河口に掘り込み式の港がつくられており、40～50 隻の漁船が係留されている。港の脇には「小茂田湾竣工記念碑」が建っていた。厳原漁協佐須支所が 1980（昭和 55）年 11 月に建てたものである。河口から内陸部に入ったところなので、静穏度は極めて高い。

歴史的にみると佐須浦は元寇の主戦場になったところである。1274 年の文永の役で、元と高麗軍 33,000 人のうち約 1,000 人が佐須浦に上陸した。それを迎え撃ったのが宗資国以下 80 余騎で激戦の果てに殲滅された。小茂田神社はこの資国を軍神として祀っている。

小茂田は、海の近くの小茂田浜（32 戸、76 人）と山裾に固まる小茂田（59 戸、139 人）の 2 つの集落からなる。佐須川の両岸は小規模ながら沖積平野が広がり、比較的大きな水田が開けている。おそらく米は自給できる環境にあったと思われる。集落のはずれに佐須中学校が置かれていた。

県道 24 号を北上する。県道は山の中を通り、海に出たところが阿連^{あゐれ}（99 戸、214 人）の集落である。外海に面する集落の中では比較的大きな規模である。集落は阿連川河口に形成されており、集落の先に阿連漁港（第 1 種）が整備されている。漁港には 10 隻ほどの漁船が係留されていた。集落入口付近の山裾には海に向かって墓石が並ぶ。その数は 60～70 基と結構多い。阿連川流域には田が多い。かつては近隣の浦々にも多くの農地があったようで、比較的恵まれていた環境だった。中世のころは農業と同様、漁業も盛んだったが、江戸時代になると、藩の政策によって禁止され、農業一本となった。その後、明治時代になると半農半漁で暮らしを支えたといわれている。



元寇 750 年を記念して建造された宗助国の騎馬像（左）阿連川河口に発達した阿連の集落（右）

浅茅湾南岸西部（今里～洲藻）

阿連の先が**今里**（73 戸、171 人）の集落である。県道 24 号は浅茅湾に出た。小さな川の河口部は深い入江で、漁港にもなっている。比較的大きなイカ釣り漁船が湾の東側に 7～8 隻、横向きに係留されている。一方湾の西側は手製の浮棧橋がつくられ、船外機を中心の 15～16 隻の磯船が係留されていた。集落は河口から少し奥まったところに形成され、集落と海の間は農地になっている。阿連と同様、半農半漁の暮らしを立ててきたのと考えられる。

今里から細い道を御崎に向かう途中に**尾崎**（73 戸、170 人）の集落がある。浅茅湾側の海岸沿いを進むと、湾内にたくさんのマグロ養殖用の生簀が見えてくる。ほとんどが円形生簀である。上述したようにこの尾崎は対馬市最大のマグロ養殖産地なのだ。

尾崎から県道 24 号に戻り、山を越えた先が**吹崎**（21 戸、37 人）である。吹崎浦という小さな入り江の奥の谷あいを開けた集落で、漁船は 2 隻しか係留されていなかった。吹崎の語源は金田城の西に当たるこの集落の見張りが貝を吹いて本城に知らせたという説と潮の出入り口が狭く地形が袋に似ているという 2 つの説があるとのことだ。

県道をさらに進むと**箕形**（22 戸、45 人）の集落に入る。箕形浦という細長い入江の奥まったところに形成されている。集落を挟んだ両側に結構広い農地があり、吹崎とは対照的に半農半漁だったと思われる。集落の高台には墓地があり、10 数基の墓石が並び、「つる荘」という民宿があった。さらに豪邸 2 棟が目立った。

県道から鶏知に向かう途中に**洲藻**（65 戸、127 人）がある。比較的大きな河川である洲藻川沿いに続く典型的な農村集落で、人家が点在し、川の両側に農地が広がる。ここからは白嶽がよく見える。



尾崎のマグロ養殖生簀（左）、吹崎のある湾（右）

浅茅湾芋崎半島（黒瀬～樽ヶ浜）

国道 243 号を走り、鶏知の手前で左折し、一般県道 197 号を竹敷に向かう。もともと海軍の施設があったことから竹敷に向かう道路はよく整備されており、走りやすい。

竹敷（133 戸、259 人）の集落は小式崎の先端付近にかけて帯状に連なる。海岸線に平行に集落が形成され道路を挟んだ背後は山で、農地はほとんどない。

もともと軍の施設があったことから比較的大きな海面が地方港湾になっている。集落の中ほどに美津島町西海漁協の支所があり、集落の北側のはずれあたりに海上自衛隊対馬防備隊の本部が置かれている。本部の前には浮棧橋が整備されていた。

竹敷は古くから防人の地として知られ、万葉集の防人の歌にも竹敷の名が詠まれている

という。明治時代には海軍要港部が設置され、上述した「万関の瀬戸」の開削工事が行われた。多い時には2千数百人が住んでいたといわれ、大変にぎわった時代もあったようだ。

竹敷から来た道に戻り、途中から芋崎に向かう細い道路に入る。さらに途中の坂を大きく下った先に黒瀬（25戸、53人）の集落があった。細い谷あいには形成された小さな集落である。集落背後の山の上にわずかばかりの農地がある。黒瀬の対岸が金田城跡で、途中から見えた湾がこの黒瀬集落前の湾である。もともと半農半漁を生業としており、現在はヒオウギガイと真珠の養殖が営まれている。湾内に浮棧橋式の作業小屋があり、ヒオウギガイの養殖籠の洗浄作業を行う女性がいた。恐らく対馬でヒオウギガイの養殖を営むのはこの黒瀬だけだろう。

昼ヶ浦に向かう山中を走っていると、間伐作業をしている手前でイノシシの幼獣・瓜坊が3頭横切った。対馬は今から約300年前に、陶山訥庵によって「猪鹿追詰覚書」が実施され、イノシシは絶滅している。しかしいつのまにか島に入り込み、1994（平成6）年に1頭が目撃されてから急速に増え、現在の生息数は4万頭を越えているとされている。

山道の途中に材木の伐採現場が現れ、玉切りにした杉が積まれていた。ここから左の山道を進むとロシア軍艦の泊留地跡があることを示す案内板が出ていた。芋崎の付け根に相当し、昼ヶ浦から小さな湾を一つ隔てたところだ。もちろん現場までの間には集落はないし、かなり狭い山道になる。1人で事故に会うと大変なので行くのは断念し、昼ヶ崎に向かう。

浅茅湾の尾崎浦に現れたロシア軍艦（ポサドニック号）が芋崎に上陸したのは1861（文久元）年2月のことであった。宿泊施設と石積みの波止場、土塁に加えて、浴場、家畜小屋などの生活施設を建設し、約6ヶ月間占拠したのである。この時、ロシア軍は対馬や壱岐の周辺海域を測量して精密な海図を残している。幕府は外国奉行小栗忠順^{ただまさ}を派遣して交渉に当たさせたが退去させることができず、結局、英国艦隊の強硬な抗議でロシア艦は退去した。日本は退去させるだけの軍事力をもたず、一方、英国艦隊は武力をもっていた。外交交渉には武力が必要であることをわが国政府は痛感したはずだ。なおロシア艦船が退去した後、幕府が構築した諸施設の徹底した撤去を求めたが無視され、150年以上たった現在でも波止場の礎石や井戸が残されている。



黒瀬集落でヒオウギガイの養殖籠を清掃する女性（左）、昼ヶ浦の集落（右）

昼ヶ浦（32戸、73人）は芋崎半島の先端にある。浅茅湾の入口に近く、古くから海上交通の要所であった。集落は2つの小さな湾の山際に形成されている。2つの湾の奥部は埋め立てられて比較的広い用地が確保されている。昼ヶ浦もマグロ養殖が盛んなところで、2001（平成13）年から始まった。現在7経営体がマグロ養殖を営む。周辺海域には直径

20mほどの円型生簀が並ぶ。40～50 kgサイズに育てて出荷するらしい。結構儲けている人もいるようで、集落内には「マグロ御殿」と思われる豪邸も見られた。集落の入口に立派な墓があり、粟屋家が7基と圧倒的に多く、これに寺崎家の4基が続いた。この他は高雄、黒岩、新庄、三島がそれぞれ1基ずつ見られた。

対馬防備隊

上述した旧海軍の竹敷要港部の跡地は、現在対馬防備隊の本部が置かれている。海上自衛隊の佐世保地方隊に所属し、対馬近海や対馬海峡を航行する艦船の監視活動が行われている。

この基地に登る坂の脇に昭和天皇皇后両陛下の「行幸啓記念の碑」が置かれている。この石碑は1990（平成2）年5月に対馬防備隊の隣の敷地にあった大洋真珠を視察したのを記念し、大洋真珠が同社の敷地内に建立したものであった。ところがこの大洋真珠は上述したように倒産し、その敷地を韓国系資本が買収して「対馬リゾート」という宿泊施設を建設した。そして石碑は同社の敷地内に残されたままになっていた。このことを危惧した日本会議長崎対馬支部は韓国系資本の土地から対馬防備隊の敷地に移すべく基地側と交渉し、2016（平成28）年12月に現在地への移転が実現したものだ。

この石碑の近くに海軍用地標石が残っている。1898（明治29）年に海軍初の要港部がこの竹敷の地に設置されたが、海軍が買い上げた用地と民有地の境に設けられたものである。

ところで日本政府は2022年9月に「重要土地利用規制法」を施行し、自衛隊や海上保安庁、米軍基地、原子力発電所、空港などの周囲1 kmおよび国境離島を「注視区域」に指定し、政府が土地や建物の利用実態、所有者の氏名、国籍などを調査できるようにした。そして重要性が高い施設周辺は「特別注視区域」に指定し、200 m²以上の土地の売買に事前届け出を義務づけた。

対馬はもちろん国境離島であるし、自衛隊の隣にある土地は当然ながら「特別注視区域」に指定されている。ただ、大洋真珠の土地が売買されたのは平成17～18年ごろなのでもちろん土地取引に規制はかかっていなかった。自衛隊基地の隣の土地が韓国系資本に買われたことが、この法律制定を促したことは間違いなさだろう。近くにいた人に聞いたところでは、このリゾートホテルは韓国人の宿泊客が圧倒的に多いそうだ。



対馬防備隊の基地（左）、基地への坂の手前に移設された「行幸啓記念の碑」（右）

【文献】

宮本常一・山本周五郎・西光速・山代巳監修（1995）：日本残酷物語2、忘れられた土地。平凡社。東京 第1章島に生きる人々、禁じられた海。

宮本常一著作集28、対馬漁業史

永尾佳代編（2005）：対馬真珠の海に生きる。創言社。福岡県

ツシヤママネコ交通事故防止のためのエコドライバーズマニュアル。

津田良樹（ ）：対馬鰐浦にみる集落と家屋の持続と変容。個別共同研究4 持続と変容の実態の研究—対馬60年を事例として。231-243。

小林秀輝・藤田直子（2017）：長崎県対馬における石屋根の倉の分布と残存状況の実態に関する研究。ランドスケープ研究 80（5），531-536。

森下涼（2012）：対馬鰐浦におけるコヤの形成原理に関する研究。大阪市立大学修士論文概要集。